

鹿^{isa}児^{sen}島^{chou}県^{me}大^{te}島^{gu}郡^{gu}伊^{isa}仙^{sen}町^{chou}目^{me}手^{te}久^{gu}

^{Naka} ^{suji} ^{kawa} ^{tomb}
中筋川トウル墓跡

目手久地区畑地帯総合整備事業（担い手育成型）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2010年3月
鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会

鹿^{isa}児^{sen}島^{chou}県^{me}大^{te}島^{gu}郡^{gu}伊^{isa}仙^{sen}町^{chou}目^{me}手^{te}久^{gu}

Naka suji kawa tumb
中筋川トウル墓跡

目手久地区畑地帯総合整備事業（担い手育成型）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2010年3月
鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会

序 言

奄美諸島にはトゥール墓と呼ばれるお墓が多く残されています。トゥールとは岩陰や洞穴内にお骨を安置する習俗のことで、類似するお墓は琉球列島の各地で確認されていると聞いております。幕末期における奄美大島の習俗を記した『南島雑話』（名越左源太著）には、戸保呂（とほろ）之図が描かれており、「山の斜面、崖、岩陰などを利用した葬所」と解説されています。

中筋川トゥール墓は畑地帯農村整備事業の工事中に発見され、発見後直ちに発掘調査が行なわれました。調査の結果この遺跡は今から350年ほど前の墓地であったことが明らかになりました。

幼い頃、トゥールに行っただけではいけないとしつけられたものでした。時代の移り変わりとともに、こうしたお墓は馴染みの浅い場所となりましたが、遺跡の調査を通して伝統的な島の風習と死者を敬う先人の心を改めて知ることが出来ます。遺跡のあった地は畑地に改良されましたが、このたびの調査で明らかとなったことを広く地域に伝えるべく、出土品を積極的に活用していくことをお約束する次第であります。

調査に際し、関係機関、各専門の先生、集落の皆さまには大変お世話になりました。最後に感謝の念を記し、序文と代えさせていただきます。

平成22年1月

伊仙町教育委員会
教育長 時任武男

例言

1. 本書は、伊仙町教育委員会による鹿児島県大島郡伊仙町目手久所在中筋川トゥール墓跡の発掘調査報告である。
2. 調査は、伊仙町教育委員会が鹿児島県大島支庁徳之島事務所の委託を受け、平成19年度に行なった。
3. 調査の期間は平成18年12月26日から28日、平成19年2月22日から24日、3月12日であった。
4. 本書で用いたレベル高は海拔絶対高で表わし、方位は真北を示す。
5. 報告書抄録に示した北緯と東経は、Google社による地球儀ソフトGoogleEarthによるものであり、基準点測量によって得たものではない。
6. 本書の執筆は、次の通りである。
第1部 新里 亮人(伊仙町教育委員会)
株式会社 古環境研究所
竹中 正巳・下野真理子(鹿児島女子短期大学)
町 健次郎(瀬戸内町教育委員会)
第2部 竹中 正巳・下野真理子(鹿児島女子短期大学)
7. 掲載実測図は、遺構実測図1/20と1/30、出土遺物は1/2と1/6で掲載している。
8. 参考、引用文献は、章、節、項末に適宜記している。
9. 出土遺物の産地と年代観については鹿児島大学法文学部の渡辺芳朗先生にご指導いただいた。
10. 出土遺物の写真撮影は、伊仙町教育委員会の新里亮人が担当した。
11. 出土遺物は、伊仙町教育委員会が保管し、その一部を伊仙町立歴史民俗資料館に展示している。
12. 本書の編集は新里亮人が行なった。

目次

序言

例言

第 I 部 中筋川トゥール墓跡の発掘調査	1
第 1 章 遺跡の位置と環境	3
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3
第 2 章 調査の経過	7
1. 調査に至る経緯	7
2. 調査の概要	7
3. 調査組織	7
4. 調査日誌	8
第 3 章 発掘調査の成果	9
1. 発掘調査の手順	9
2. 遺構	9
(1) 前庭部	9
(2) 墓坑	9
(3) 人骨の検出状況	9
3. 出土遺物	17
(1) 蔵骨器	17
(2) 供献品	21
(3) 蝶番、飾り金具、鉄釘	24
4. 中筋川トゥール墓跡における樹種同定 株式会社古環境研究所	26
(1) 試料	26
(2) 方法	26
(3) 結果	26
(4) 所見	26
第 4 章 中筋川トゥール墓跡から出土した人骨 竹中 正巳・下野真理子	28
1. 出土状況	28
2. 最終的に本墓跡に納められた人骨の一次葬	28
3. 出土人骨の性と年齢	28
4. 形質	29
5. 古病理学的特記所見	29

第5章 徳之島・伊仙町目手久の葬地関連調査記録	町 健次郎	31
1. 調査日程等		31
2. 目手久の区画		31
3. 文献ノート		36
4. メーユ一墓地の成立過程		38
(1) 明治初期のハナサキ		38
(2) 昭和期のメーユ一をめぐる凡その経過		40
5. 目手久の葬地について		42
(1) 聞き取り資料		42
(2) 人骨がある地点についての備忘録		45
6. その他、民俗聞取調査ノート		47
7. 今後に向けて		49
第6章 総括		51
1. 遺跡の概要		51
2. 墓跡の特徴		51
3. 人骨と遺物の検出状況		51
4. 出土遺物の特徴		52
5. 出土人骨の特徴		52
6. 民俗調査の結果		52
7. 遺跡の取り扱いについて		52

第Ⅱ部 中筋川トゥール墓跡出土人骨の計測と観察の結果(CD-R収録)

竹中正巳・下野真理子

図版

報告書抄録

[記載箇所以外は全て新里亮人執筆]

挿図目次

第 I 部 中筋川ツール墓跡の発掘調査

第 1 図	徳之島の位置と伊仙町の遺跡分布	4
第 2 図	中筋川ツール墓跡の位置	10
第 3 図	中筋川ツール墓の平面、立面図	11
第 4 図	人骨出土状況(上面)	13
第 5 図	人骨出土状況(下面)	15
第 6 図	グリッド配置図	16
第 7 図	蔵骨器(1)	18
第 8 図	蔵骨器(2)	19
第 9 図	蔵骨器(3)	20
第 10 図	蔵骨器(4)	21
第 11 図	供献品(1)	22
第 12 図	供献品(2)	23
第 13 図	供献品(3)	24
第 14 図	螺螄、飾り金具、鉄釘	25
第 15 図	中筋川ツール墓跡の木材	27
第 16 図	目手久の区画図	32
第 17 図	戦後・東目手久の運動会組分け区画	33
第 18 図	その他、目手久の空間呼称位置	35
第 19 図	目手久(東目手久)／「メーユヌナヂ」 付近の墓石配置概略	39
第 20 図	目手久の墓地関係位置	44
第 21 図	南島雑話に描かれた戸保呂之図	51

第 II 部 中筋川ツール墓跡出土人骨の計測と観察 の結果(付録 CD-R)

第 22 図	中筋川ツール墓跡出土人骨の遺存部位	
--------	-------------------	--

表目次

第 I 部 中筋川ツール墓跡の発掘調査

第 1 表	伊仙町所在遺跡一覧	5
-------	-----------	---

第 II 部 中筋川ツール墓跡出土人骨の計測と観察 の結果(付録 CD-R)

第 2 表	出土人骨の性別・年齢・特記事項	
第 3 表 - 1	出土男性成人骨の脳頭蓋計測値(mm)	及び示数
第 3 表 - 2	出土女性成人骨の脳頭蓋計測値(mm)	及び示数

第 4 表 - 1	出土男性成人骨の顔面頭蓋計測値 (mm)及び示数	
第 4 表 - 2	出土女性成人骨の顔面頭蓋計測値 (mm)及び示数	
第 5 表 - 1	出土男性成人骨の顔面平坦度計測値 (mm)及び示数	
第 5 表 - 2	出土女性成人骨の顔面平坦度計測値 (mm)及び示数	
第 5 表 - 3	出土未成年骨の顔面平坦度計測値 (mm)及び示数	
第 6 表 - 1	出土男性成人骨の頭蓋形態小変異 の出現状況	
第 6 表 - 2	出土女性成人骨の頭蓋形態小変異 の出現状況	
第 6 表 - 3	出土性別不明成人骨の頭蓋形態小変異 の出現状況	
第 7 表 - 1	出土男性成人骨の上腕骨計測値(mm) 及び示数	
第 7 表 - 2	出土女性成人骨の上腕骨計測値(mm) 及び示数	
第 8 表 - 1	出土男性成人骨の橈骨計測値(mm) 及び示数	
第 8 表 - 2	出土女性成人骨の橈骨計測値(mm) 及び示数	
第 9 表	出土男性成人骨の尺骨計測値(mm)及び示数	
第 10 表 - 1	出土男性成人骨の大腿骨計測値(mm) 及び示数	
第 10 表 - 2	出土女性成人骨の大腿骨計測値(mm) 及び示数	
第 11 表 - 1	出土男性成人骨の脛骨計測値(mm) 及び示数	
第 11 表 - 2	出土女性成人骨の脛骨計測値(mm) 及び示数	
第 12 表	出土男性頭蓋計測値(mm)及び示数の比較	

図版目次

図版1 中筋川トゥール墓跡発見時の状況

- 1 遺跡遠景(北より)
- 2 遺跡遠景(南より)
- 3 伐採前遺跡近景(東より)
- 4 伐採後遺跡近景(東より)
- 5 内部の状況①(東より)
- 6 内部の状況②(東より)
- 7 取り扱いに関する協議(東より)
- 8 調査直前の状況(東より)

図版2 中筋川トゥール墓跡の調査状況

- 1 伐採、清掃後の近景(東より)
- 2 写真測量風景(東より)
- 3 人骨検出作業(北より)
- 4 人骨検出作業(西より)
- 5 人骨取り上げ作業(東より)
- 6 人骨梱包作業(東より)
- 7 人骨検出状況(北より)
- 8 石厨子内人骨検出状況(西より)

図版3 墓内部の状況

- 1 墓内部の状況①(西より)
- 2 墓内部の状況②(東より)
- 3 墓内部の状況③(北より)

図版4 人骨の蔵骨状況

- 1 人骨の蔵骨状況①(東より)
- 2 人骨の蔵骨状況②(東より)
- 3 人骨の蔵骨状況③(東より)

図版5 蔵骨器(1)

図版6 蔵骨器(2)

図版7 供献品(1)

図版8 供献品(2)、煙管、螺番、飾り金具、鉄釘

図版9 出土人骨(1)

- 1 中筋川トゥール墓跡2号頭蓋
- 2 中筋川トゥール墓跡7号頭蓋

図版10 出土人骨(2)

- 1 中筋川トゥール墓跡16-1号頭蓋
- 2 中筋川トゥール墓跡35号頭蓋

図版11 出土人骨(3)

- 1 中筋川トゥール墓跡36号頭蓋

2 中筋川トゥール墓跡38号頭蓋

図版12 出土人骨(4)

- 1 中筋川トゥール墓跡61号頭蓋
- 2 中筋川トゥール墓跡62号頭蓋

図版13 出土人骨(5)

- 1 中筋川トゥール墓跡E6gr E-1号頭蓋
- 2 中筋川トゥール墓跡E6Gr F-1号頭蓋

図版14 出土人骨(6)

- 1 中筋川トゥール墓跡Ko20-7号頭蓋
- 2 中筋川トゥール墓跡16-1号頭蓋

図版15 出土人骨(7)

- 1 中筋川トゥール墓跡35号頭蓋
- 2 中筋川トゥール墓跡44号頭蓋

図版16 出土人骨(8)

- 1 中筋川トゥール墓跡Ko20-2号頭蓋

第 I 部

中筋川トゥール墓跡の発掘調査成果

第1章 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

琉球列島とは日本列島の南部の弧状に連なる島嶼群の総称である。その気候は亜熱帯気候に属し、一年を通して温暖な地域である。島々の縁辺にはサンゴ礁が形成され、それらに由来する琉球石灰岩の地形が確認されるところに大きな特色がある。

琉球列島は地理的なまとまりから大隅諸島、トカラ列島、奄美諸島、沖縄諸島、先島諸島に分けられている。奄美諸島に含まれる徳之島は、奄美大島と沖永良部島の間に位置する島周約84km、面積約248km²の比較的大きな島である。行政区は北西側の天城町、北東側の徳之島町、南側の伊仙町の3つの町からなり、人口は約27000人を数える。

徳之島の地形は標高200mを境に山地と段丘に区分される。島の中央部には井之川岳(665m)を主峰とする山地が南北方向にそびえており、島を東西両断している。それを取り巻くように、発達した隆起珊瑚礁の海岸段丘が海岸に向かって伸び、海岸部には断崖や砂丘が形成される。島の西岸は急峻な断崖(20～100m)が屹立するのに対し、東岸はなだらかな段丘が海へと続いている。

伊仙町の北西部に位置する犬田布岳(417m)の南西部には標高200m以下の台地が広がり、海岸部では断崖が屹立する。一方、南東部に目を向けると海岸部へと緩やかな海岸段丘が延び、喜念、佐弁、面縄の砂丘へと続いている。海岸部に注目すると、伊仙町の西部は隆起珊瑚礁の断崖、中部は岩礁、東部は砂丘地がそれぞれ発達していることが分かる。台地や段丘の多くは耕地として利用され、農作物や飼料が生産されている。河川は東側から本川、面縄川、目手久川、鹿浦川、阿権川、上成川などがあり、深い侵食谷の谷底を流れる。これらは、伊仙町北部の馬根、中山方面からそれぞれの台地を分断しながら放射状に海へと至っている。このように、伊仙町は山地、台地、河川、海浜に取り巻かれた自然環境を備えていると言える。

中筋川トゥール墓跡が所在する目手久地区は伊仙町の西部に当たり、佐弁集落と面縄集落の間に位置する。目手久集落は西目手久と東目手久の2つの地区によって構成され、現在の集落は県道を挟んで南北方向に点在している。耕作地の大半は台地やそれに隣接する谷地に立地し、サトウキビや馬鈴薯が栽培されている。遺跡は東目手久の集落内、県道から山手に800mほど登った標高約80メートルの琉球石灰岩の台地上に位置し、その周辺には畑地が広がっている。

2. 歴史的環境

現在、徳之島で確認されている遺跡は約130遺跡ある。そのうちの約半数は伊仙町内で発見されており、島内の中でも本町は遺跡が密集している地域と言える。

それらのうち最も古い遺跡は旧石器時代に遡ると言われている。伊仙町木之香の天城遺跡ではチャート製の剥片(堂込・栗林1994)、伊仙町小島のガラ竿遺跡ではA T火土灰層の下層から磨石2点が発見された(四本・伊藤2002)。これらことから徳之島における人類の活動痕跡は約25000年前頃にさかのぼる可能性が高まってきており、今後良好な状態での出土事例が期待されるところである。

縄文時代から平安時代並行期(沖縄貝塚時代前期～後期と対応)、徳之島に住む人々は台地、洞穴、岩陰、砂丘を主な居住地として、山野の動植物やサンゴ礁域に生息する魚貝類を捕食していたと考えられている。代表的な遺跡として喜念貝塚(三宅1940)、面縄遺跡群(山崎1930、牛



第1図 徳之島の位置と伊仙町の遺跡分布

ノ浜・堂込編 1985)、犬田布貝塚(吉永・宮田 1984)などが挙げられる。こうした遺跡から発見された土器はそれぞれ喜念式(縄文時代後期)、面縄前庭式(縄文時代中期)、面縄東洞式(縄文時代後期)、面縄西洞式(縄文時代後期)、犬田布式(縄文時代後期)と命名されており、琉球列島における土器編年の基礎資料として注目されている。またこの頃における墓の検出例も比較的多く、喜念原始墓(三宅 1943)、喜念クバンシャ遺跡(立神、長野編 1988)、佐弁トマチン遺跡(新里貴之 2008)、面縄第1貝塚(ノノ浜・堂込編 1985)からは人骨が検出された。墓の種類も岩陰墓、石棺墓、積み石墓などがあり多様である。

面縄第3貝塚で発見された土器は兼久式土器(河口 1974)と呼ばれており、古代並行期の奄美諸島を代表する土器として著名である。奄美大島の砂丘遺跡からは、兼久式土器に伴って中国唐代の開元通宝、本土産の須恵器や土師器、鉄器類、イモガイ製貝符、多量のヤコウガイが出土することが知られており(高梨編 2003、2005、2007、中山編 2006、若杉・尾上編 1995)、平安時代の記録に残る「夜久貝」はこうした遺跡から搬出された可能性を示唆している。

中世並行期(沖縄のグスク時代と対応)は、琉球列島の生活の中に外来食器が定着する時期で、中国、朝鮮半島の陶磁器類が遺跡から発見される。またグスクと伝えられる遺跡も少なからず発見されている。上面縄地区に所在する恩納城跡のウガンウスジと呼ばれるところからは、完形の青磁碗 12 点が工事中に発見されており(亀井 1993)、按司と呼ばれる有力者の存在を予想させる。こうした中で最も注目されるのは琉球列島唯一の中世窯業生産跡である徳之島カムイヤキ陶器窯跡(新東・青崎 1985a、b、青崎・伊藤 2001、池田 2005、新里 2005)である。当遺跡で生産された陶質の土器(須恵器、カムイヤキと呼ばれる)は琉球列島一円で使用されており、琉球列島における食器生産と流通のあり方を探る上で重要な情報を提供してくれる。窯跡の大部分は伊仙町阿三、伊仙、検福にまたがる国有林内に所在しており、窯跡の分布から大きく7つのグループに分けられている。窯跡の灰原から得られた炭化物の放射性炭素年代によって 11 世紀から 13 世紀の創業年代が与えられている。また、この頃から琉球列島一円で穀物生産が始まったことが明ら

第1表 伊仙町所在遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	時代
1	喜念按司屋敷跡	喜念上泉袋	中世
2	喜念上原	喜念上泉袋	弥生(後)
3	ヲネガン	喜念スーバテ	中世
4	本川	喜念	弥生(前)
5	喜念原始墓	喜念ムデナウ	弥生
6	ウシロマタ	喜念ワカバトウ	縄文~中世
7	ウエアタリ	喜念ウキングリ	縄文~中世
8	喜念貝塚	喜念兼久	縄文(後)~弥生(後)
9	喜念浜砂丘	喜念	
10	サクダ	佐弁サクダ	古代~中世
11	佐弁貝塚	佐弁東ミヤド	弥生(後)
12	佐弁(第二)	佐弁ミヤド	
13	佐弁トマチン	佐弁トマチン	縄文(後)~弥生
14	川嶺辻	目手久川嶺辻、川嶺下	古代~中世
15	中筋川トール墓跡	目手久中筋川	近世~近代
16	大久保	目手久字大久保	
17	上水溜	目手久上水タマリ	
18	恩納城跡	面縄ウガン	中世
19	面縄按司墓	上面縄	中世
20	ミツク	面縄	古墳~中世
21	面縄遺跡群	面縄兼久バル	縄文~中世
22	東浜貝塚	東面縄	弥生(後)
23	ラクラチ	面縄ラクラチ	縄文~中世
24	トラグスク	検福古里	中世
25	赤久	検福赤久	縄文
26	徳之島カムイヤキ陶器窯跡	検福(矢田、打田)、阿三(亀田、亀焼、柳田)、伊仙(東柳田、平ソコ)	中世
27	ミンツキ集落跡	伊仙ミンツキ	中世
28	平スク	伊仙平スク	縄文
29	下板割	伊仙下板割	弥生
30	瀬田海	伊仙	弥生
31	ヨツキ洞穴	阿三ヨツキ	縄文(中)~中世
32	カン田	阿三カン田	縄文~中世
33	前田	阿三前田	縄文~中世
34	あざま按司城跡	阿三字谷俣	中世
35	勘花	西阿三字勘花	中世
36	ウウピラ城跡	馬根	中世
37	墓地(ねーま遠留)	中山	
38	中山神社	中山	中世
39	フードグスク	阿権大当原	中世
40	木之香	木之香	縄文~弥生
41	天城	木之香	旧石器、縄文(晩)、古墳
42	アマングスク	木之香島権	中世
43	下島権	木之香島権	縄文(晩)~中世
44	カメコ	大田布カメコ	縄文(晩)
45	前泊西貝塚	西大田布	弥生
46	宮戸原	大田布宮戸原	
47	大田布記念碑	大田布	弥生
48	大田布貝塚	大田布連木竿 1152 番地	縄文~弥生
49	アジファー	大田布	弥生~中世
50	アジファーB	大田布	中世
51	妙巖按司城跡	大田布明眼	中世
52	宮里原	上晴宮里原	縄文~中世
53	後竿	小島後竿	中世
54	大成川	小島大成川	
55	ガラ竿	小島ガラ竿	旧石器~中世
56	上成川	糸木名上成川	縄文
57	河地	糸木名字河地	縄文~中世

かとなっている。伊仙町目手久の川嶺辻遺跡では13世紀から17世紀の水田跡が発見され、水田とともにイネ、ムギ、アワなどの栽培植物が検出された(新里2010)。

近世、近代(江戸時代から戦前)に対応する遺跡としては島内各地に所在するトゥール墓がある。トゥール墓とは山の斜面、崖、岩陰などを利用した葬所のことを指す。徳之島で発見されたトゥール墓の概括的な研究は義憲和によって行なわれているが(義1992)、本島におけるトゥール墓の本格的な発掘は今回の調査が最初である。

参考文献

- 青崎和憲・伊藤勝徳(編) 2001『カムイヤキ古窯跡群Ⅲ』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(11) 伊仙町教育委員会
- 池田榮史 2005『南島出土須恵器の出自と分布に関する研究』平成14年度～平成16年度科学研究費補助金基盤研究(B)・(2) 研究成果報告書 琉球大学法文学部
- 牛ノ浜修・堂込秀人(編) 1983『面縄第1、第2貝塚』伊仙町埋蔵文化財調査報告書(1) 伊仙町教育委員会
- 牛ノ浜修・堂込秀人(編) 1985『面縄貝塚群』伊仙町埋蔵文化財調査報告書(4) 伊仙町教育委員会
- 亀井明徳 1993『南西諸島における貿易陶磁器の流通経路』『上智アジア学』11 上智大学アジア文化研究所
- 義 憲和 1992『徳之島の墓地(古代・中世・近世)』徳之島三町文化財保護審議委員連絡協議会
- 栗林文夫・堂込秀人(編) 1994『天城遺跡・下島権遺跡』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(9) 伊仙町教育委員会
- 国分直一・河口貞徳・曾野寿彦・野口義磨・原口正三 1959『奄美大島の先史時代』『奄美-自然と文化 論文編』九学会連合奄美大島共同調査委員会
- 新東晃一・青崎和憲(編) 1985a『カムイヤキ古窯跡群Ⅰ』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(3) 伊仙町教育委員会
- 新東晃一・青崎和憲(編) 1985b『カムイヤキ古窯跡群Ⅱ』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(5) 伊仙町教育委員会
- 新里亮人(編) 2005『カムイヤキ古窯跡群Ⅳ』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(12) 伊仙町教育委員会
- 新里亮人(編) 2010『川嶺辻遺跡』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(13) 伊仙町教育委員会
- 新里貴之 2008『喜念・佐丹砂丘遺跡群トマチン遺跡発掘調査概要報告・トマチン遺跡第1次～3次調査の概要』『人類学研究』14 人類史研究会
- 高梨 修(編) 2003『奄美大島名瀬市小湊フワガネク遺跡群遺跡範囲確認発掘調査報告書』名瀬市文化財書四 名瀬市教育委員会
- 高梨 修(編) 2005『奄美大島名瀬市小湊フワガネク遺跡群Ⅰ』名瀬市文化財書七 名瀬市教育委員会
- 高梨 修(編) 2007『奄美大島奄美市小湊フワガネク遺跡群Ⅱ』奄美市文化財書一 奄美市教育委員会
- 立神次郎・長野真一(編) 1988『喜念原始墓・喜念クバンシャ遺跡・喜念クバンシャ岩陰墓』伊仙町埋蔵文化財調査報告書(7) 伊仙町教育委員会
- 中山清美(編) 1995『用見崎遺跡』笠利町文化財調査報告書第20号 笠利町教育委員会
- 中山清美(編) 2006『マツノト遺跡』笠利町文化財調査報告書第28号 笠利町教育委員会
- 三宅宗悦 1940『南島の先史時代』『人類学先史学講座』第16巻
- 三宅宗悦 1943『大隈国徳之島喜念原始墓出土製品及び出土人骨の技術に就いて』『考古学雑誌』第33巻10号
- 山崎五十磨 1930『鹿児島県大島郡徳之島面縄貝塚に就いて』『考古学雑誌』第20巻10号
- 吉永正史・宮田栄二(編) 1984『犬田布貝塚』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(2) 伊仙町教育委員会
- 四本延宏・伊藤勝憲 2002『徳之島・伊仙町小島グラ卒遺跡の確認調査～A・T火山灰下層の出土石器について～』『南島考古だより』69 沖縄考古学会
- 若杉竜太・尾上博一(編) 1996『用見崎遺跡Ⅲ』『研究室活動報告』32 熊本大学文学部考古学研究室

第2章 調査の経過

1. 調査に至る経緯

中筋川トゥール墓跡は、畑地帯総合整備事業(目手久地区)の工区内で発見された近世から近代の墓地である。平成18年6月、伊仙町教育委員会は伊仙町目手久地区における農村整備事業の工事に大量の骨が納骨された横穴が発見されたとの連絡を受け、事業主体者である鹿児島県農政部農地整備課(徳之島事務所 土地改良課)とその取り扱いについて協議を行なったその結果、工事の事前に発掘調査を行ない、遺跡を記録保存することとなった。

この地区は周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されていなかったため、伊仙町教育委員会が、平成18年6月20日、鹿児島県教育庁文化財課に遺跡発見届けを提出した結果、同年9月29日に埋蔵文化財包蔵地としての決定通知を受けた。平成18年10月10日、周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事の通知が提出され、同年12月26日より発掘調査を行なうこととなった。遺跡は伊仙町目手久の中筋川に所在することから中筋川トゥール墓跡と名称を付けた。トゥール墓とは、山の斜面、崖、岩陰などを利用した葬所のことを指し、奄美諸島に多く点在する古い墓地の総称として知られている。

発掘調査は伊仙町教育委員会が主体となり、鹿児島県教育庁文化財課、鹿児島女子短期大学の指導のもとに行なった。調査の期間は平成18年12月26日から28日、平成19年2月22日から24日、3月12日～14日であった。

2. 調査の概要

遺跡名	：中筋川トゥール墓跡
所在地	：伊仙町目手久字中筋川
事業名	：畑地帯総合整備事業(担い手育成型)目手久地区 委託18・7
事業者	：鹿児島県農政部農地整備課(徳之島事務所 土地改良課)
調査主体	：伊仙町教育委員会
調査面積	：100㎡
調査期間	：平成18年12月4～6日、26日～27日、平成19年2月22日～24日、3月12日～14日

3. 調査組織

調査の組織は以下の通りである。

平成18年度(発掘調査)

事業主体	鹿児島県農政部農地整備課(徳之島事務所 土地改良課)	
調査主体	伊仙町教育委員会	
調査責任	伊仙町教育委員会教育長	中野 幸次
調査事務	社会教育課長	窪田 良治
	社会教育課長補佐	西 吉広
	社会教育課主幹兼係長	伊藤 勝徳
調査担当	社会教育課学芸員	新里 亮人
調査指導	鹿児島県教育庁文化財課	堂込 秀人
	鹿児島女子短期大学	竹中 正巳

	奄美市教育委員会	中山 清美
写真測量委託	株式会社 埋蔵文化財サポートシステム	
調査補助	作田恵、富いずみ、山口節子	

平成19年度(資料整理、自然科学的分析)

事業主体	鹿児島県農政部農地整備課(徳之島事務所土地改良課)	
調査主体	伊仙町教育委員会	
調査責任	伊仙町教育委員会教育長	中野 幸次(11月まで) 時任 武男(11月から)
調査事務	社会教育課長	窪田 良治
	社会教育課長補佐	幸多 健策
	社会教育課主幹兼係長	伊藤 勝徳
調査担当	社会教育課学芸員	新里 亮人
調査指導	鹿児島県教育庁文化財課	堂込 秀人
	鹿児島県教育長文化財課	前迫 亮一
	鹿児島女子短期大学	竹中 正巳
人骨分析委託	鹿児島女子短期大学	竹中 正巳
科学分析委託	株式会社 古環境研究所	
整理作業補助	作田恵、富いずみ、永田喜美代、松田千晴、山口節子、琉涼子	

平成21年度(発掘調査報告書作成)

事業主体	鹿児島県農政部農地整備課(徳之島事務所農村整備課)	
調査主体	伊仙町教育委員会	
調査責任	伊仙町教育委員会教育長	時任 武男(2月まで) 亀山 喜一郎(2月から)
調査事務	社会教育課長	幸多 健策
	社会教育課長補佐	西 吉広
	社会教育課主幹兼係長	伊藤 勝徳
調査指導	鹿児島大学法文学部	渡辺 芳朗
	鹿児島女子短期大学	竹中 正巳
報告書作成	社会教育課文化財主査	新里 亮人
事務補助	社会教育課社会教育指導員	勝 綾美
整理作業補助	作田恵、富いずみ、松田千晴	

4. 調査日誌

- 平成18年12月4日～6日 調査区の清掃と写真測量を行なう。
- 平成18年12月26日～28日 人骨の取り上げと梱包を行なう。
- 平成19年2月22日～24日 人骨の取り上げと梱包を行なう。
- 平成19年3月12日～14日 写真測量と人骨の取り上げと梱包を行なう。

第3章 発掘調査の成果

1. 発掘調査の手順

中筋川トゥール墓跡は琉球石灰岩の丘陵を削り貫いた横穴の中に営まれており、その墓坑内に人骨の他、蔵骨器や供献品が散乱している状況が確認された。そのため発掘調査の事前に墓坑内の写真測量によって、表面に露出する人骨の納骨状況を図化し、その図を元に人骨および出土品に番号を付けそれらを取り上げた。最初の取り上げの後、それらの下段に新たに人骨が確認されたので、検出後再び写真測量を行ない、2度目の取り上げを進めた。

墓坑内に堆積した埋土は、第1層が石灰岩の小礫層、第2層が茶褐色土層であったが、下段の埋葬人骨は第1層に埋没しており、その下の第2層中にも人骨が含まれる状況であった。第2層に含まれる人骨は小片化したものが多かったため、墓坑内に1m×1mのグリッドを設けグリッド一括で取り上げを行なった。

2. 遺構

(1) 前庭部

墓跡は標高約84mの琉球石灰岩の丘陵上にあり、その斜面をほぼ垂直に断ち切って平面形状の平坦面を設けて前庭部が作られている。前庭部の両側には、前庭部入口から墓坑開口部に向かって石灰岩の石積みが設置される。

西側の石積みは2.5m×3.5mほどの規模で、1.2m程度の高さで積まれている。東側の石積みは規模2m×1.5m程度で、その高さは1.2mであった。両側の石積みは平面形が「コ」の字形になっており、石積み内の空間部には土が堆積している。西側の石積みの空間部には巨木が立っていたようであるが、墓に伴うものであったかは確認できなかった。

これら2つの石積みは墓坑開口部を半閉塞しながら、前庭部に墓道を設ける役割を担っていたと想定される。

(2) 墓坑

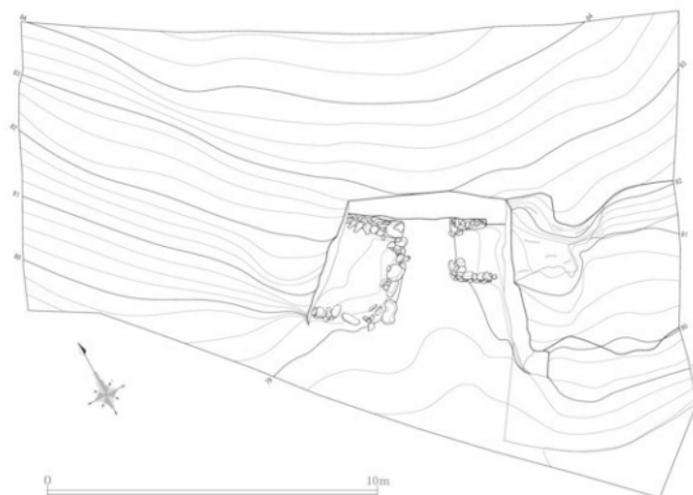
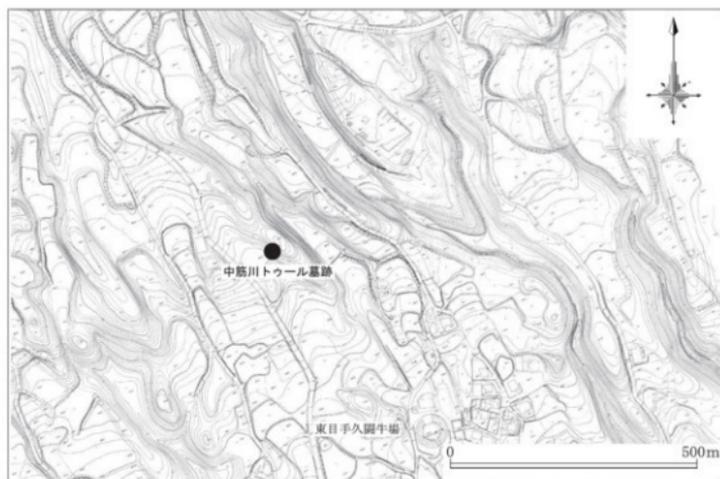
墓坑は前庭部の奥壁側から石灰岩を削り貫いて横穴が設けられている。墓坑内の左側壁は比較的丁寧に成形されているが、右側壁は成形が粗雑なため、上面観はややいびつな形状を呈する。墓坑の規模は長辺約5.8m、短辺3.3m、墓坑入口の高さは約1mであった。

開口部は入念に成形されており、墓坑の閉塞を意識した段が明瞭に残されている。開口部の上面には凹みが2箇所を確認されたので、本来は木柱が設置されていた可能性がある。先述した石積みは開口部に沿って設置されているが、この段とはやや不整合的に積まれているため、木柱をもつ閉塞板が倒壊したのち石積みが設置された可能性が考慮される。

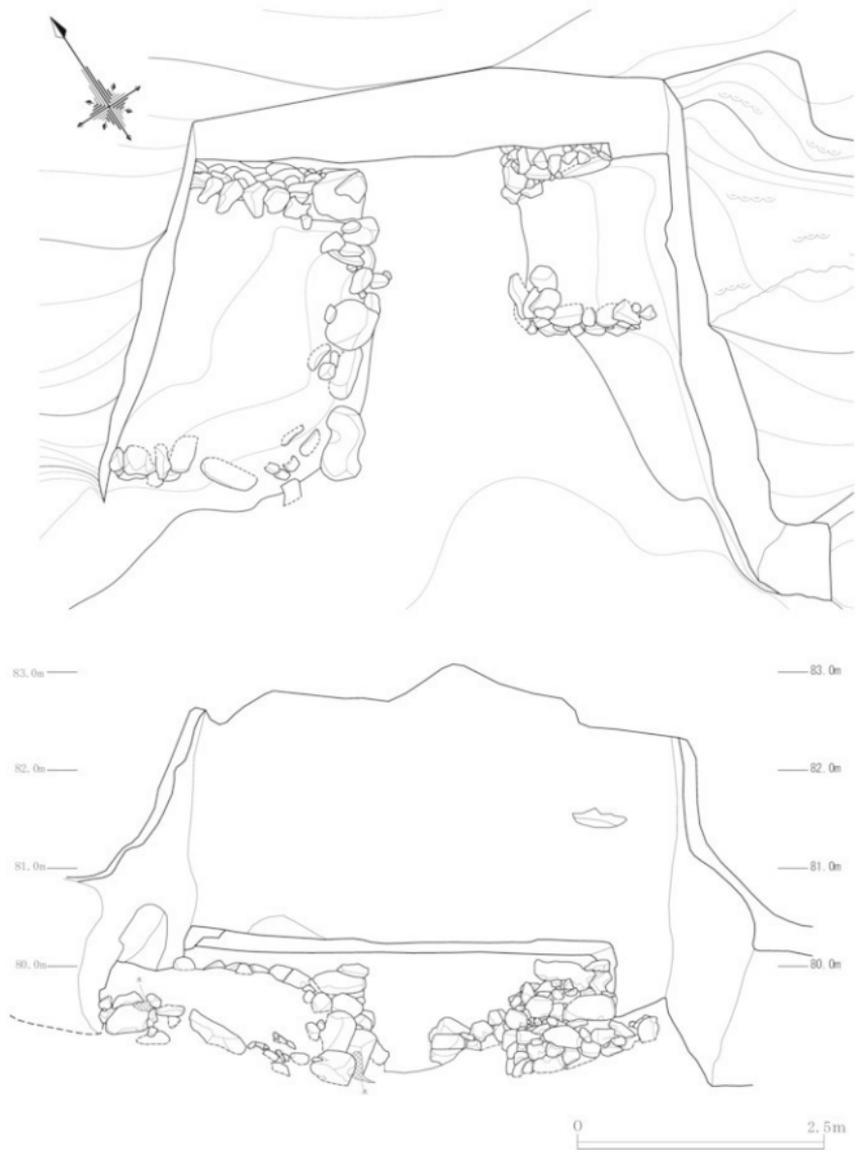
(3) 人骨の検出状況

墓坑内には多数の人骨が納骨されていた。人骨は壺や甕などの蔵骨器に収められているものと、墓坑内に直におかれるものの両者がある。人骨の部位は頭骨が大半を占め、四肢骨は僅少であった。上段の埋葬はやや乱雑に置かれている一方で、下段の埋葬は墓坑の平面形に沿った形で整然と並べられている印象を受ける。下段の埋葬は北側に顔面を向ける傾向がある。

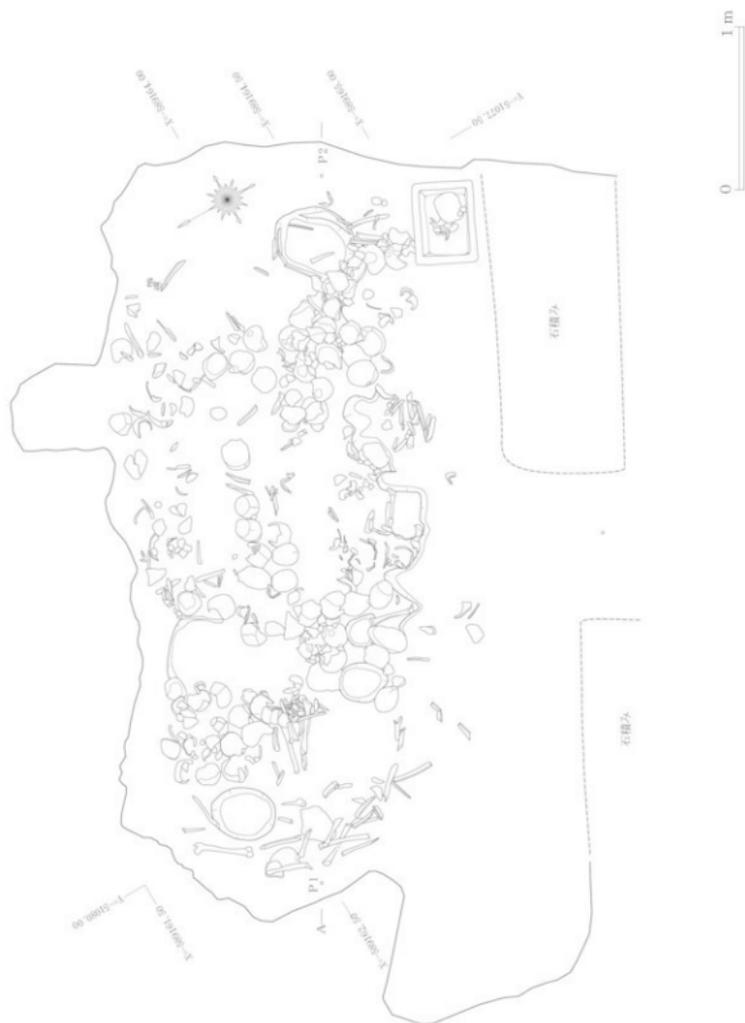
蔵骨器の一部は床面に設置した状態で置かれているので、これらは第2層堆積以前に収納されたと考えられる。蔵骨器に納められている人骨も頭骨のみが複数重なった状態で納骨される例が圧倒的に多い。



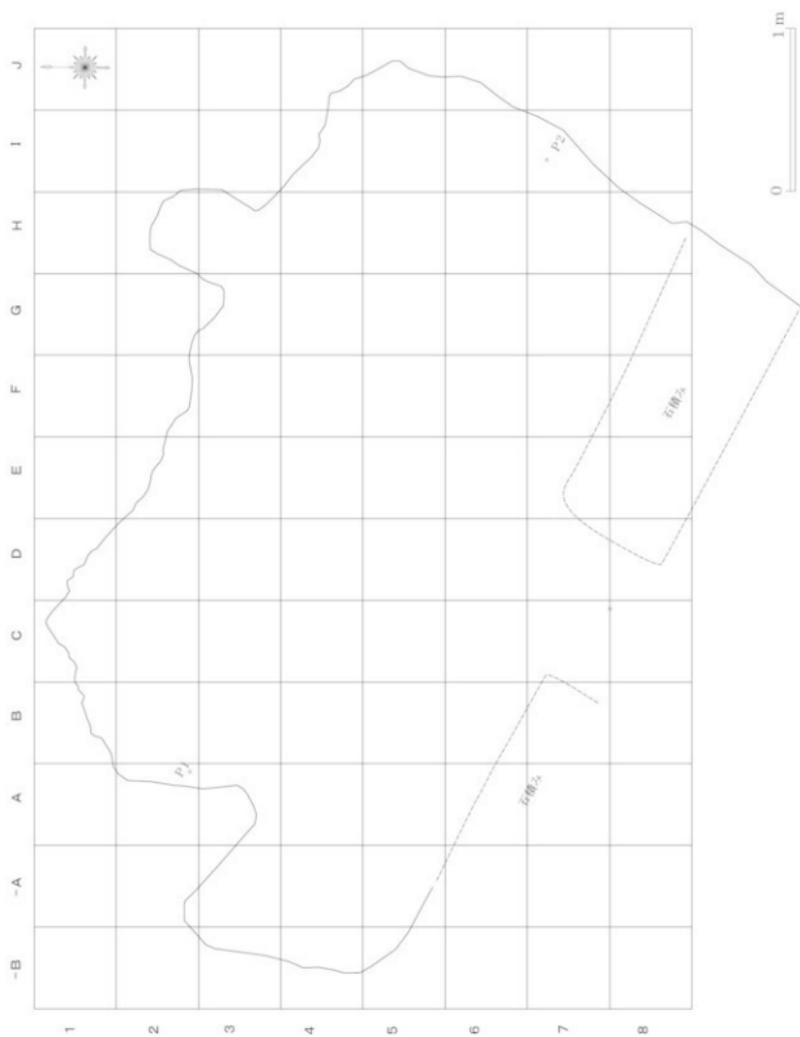
第2図 中筋川トゥール基跡の位置



第3図 中筋川トール墓跡の平面、立面図



第5図 人骨出土状況（下面）



第6図 グリッド配置図

3. 出土遺物(第7～14図、図版5～8)

(1) 蔵骨器(第7～10図、図版5、6)

第7から10図には蔵骨器を掲載している。種類は陶器(第7～9図)と石厨子(第10図)があった。陶器の器種は大形の壺(第7図)、大形の甕(第8図)、中型の壺と甕(第9図)がある。

第7図は大壺で1は中国産、2は薩摩産、3は琉球産、4から6は東南アジア産陶器と推定される。

1は方形の口縁部をもつ中国産陶器壺である。内外面には緑黄褐色の釉薬が内外面に施されている。復元口径は約24cmを計る。E-3グリッド第2層から出土した。

2は薩摩産苗代川系の陶器壺である。口縁部と胴部の一部を欠損している。蔵骨器転用のために打ち欠かれたと想定される。底径は18.0cm、残存器高さは44.0cmを計る。17世紀後半から18世紀に位置付けられる。

3は琉球産の荒焼である。口縁部は欠損している。胴部にはヘラ記号が残されており、内面は露胎となる。底径20.0cm、器高は58.0cmを測る。

4から6は東南アジア産の陶器と推定される。4は器高が低い球胴の無耳壺である。口縁部は欠損している。内外面に施釉され、肩部には重ね焼の目跡が残されている。5、6は器高が高い四耳壺である。両者とも内面は露胎となる。5は口縁部を打ち欠いた後、頭骨を納め、割った口縁部を再び被せ、蓋をした状態で検出された。6は口縁部と胴部が欠損している状態で発見された。いずれも頭骨の納骨のために打ち欠いたと想定されるが、墓坑内で検出された胴部片と接合できたため、蔵骨のための胴部打ち欠きについては確言できない。

第8図は大甕で薩摩産苗代川系の製品である。すべて肩から胴部にかけて2条の凸帯が巡らされ、内外面に施釉されている。肩が張るもの(1～3)と張らない長胴のもの(4)がある。

1は肩が張った大甕である。器壁は非常に薄い。口縁端面には貝目が確認できる。鹿児島大学の渡辺芳朗氏により17世紀後半頃の堂平窯の製品であるのご教示を受けた。口径36.0cm、底径26.0cm、器高は52.0cmを測る。

2は肩が張った大甕である。焼歪みにより底面が若干捲れ上がっている。外面にはハケ目状の調整痕が認められる。鹿児島大学の渡辺芳朗氏により、口縁部の特徴からタイ産の可能性も否定できないのご教示を得た。口径26.0cm、底径23.6cm、器高は54.0cmを測る。

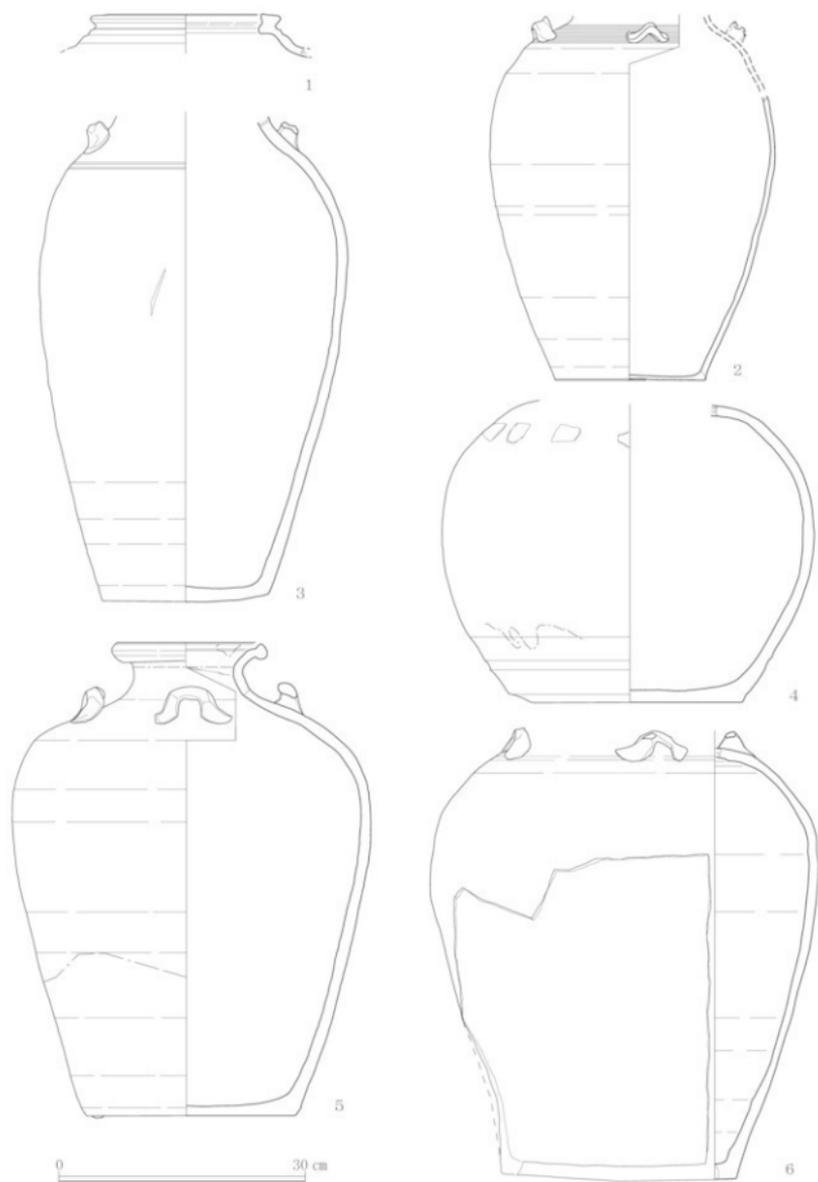
3は肩が張るタイプの大型の大甕で、口縁部断面が合形状を呈するものである。底面には外底側からの穿孔が認められる。口縁端面に貝目が残されていない特徴から18世紀中頃の所産と考えられる。口径は30.0cm、底径24.8cm、器高は56.8cmを測る。

4はT字状の口縁部をもつ長胴の甕である。底部はやや焼き歪んでいる。底面は外底側から穿孔されている。19世紀後半以降の製品である。口径は32.0cm、底径22.2cm、器高は60.2cmを測る。

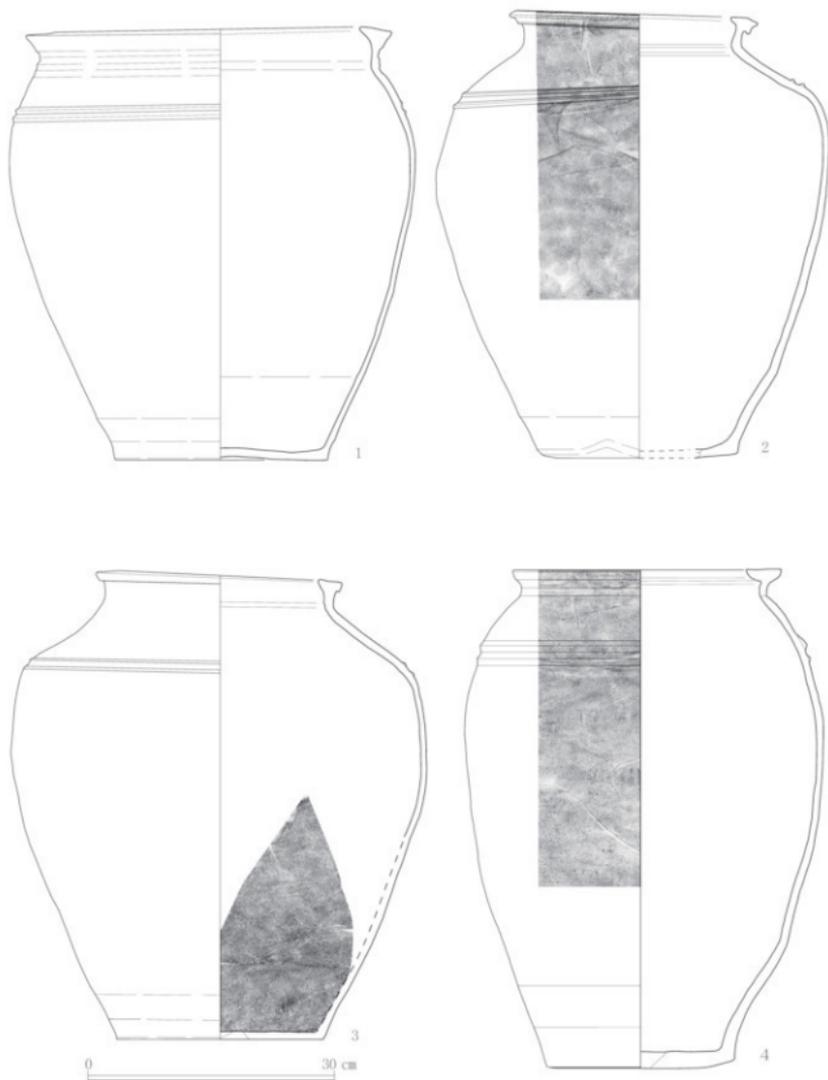
第9図には中形の壺と甕を掲載している。1は壺、2から4は甕で、1、2は薩摩産苗代川系、3、4は肥前系の可能性がある。

1は断面台形形状の口縁部をもつ壺である。内外面ともに施釉されている。胴部内面には無文の当て具痕が残されている。底部にはカキ目状の調整痕が認められる。口縁端面には貝目が確認されるため17世紀後半頃から18世紀の所産と推察される。口径14.6cm、底径14.4cm、器高は36.4cmを測る。

2は断面逆T字状の口縁部をもつ甕である。胴部には1cmほどの穿孔が認められる。叩きによって成形され、器壁は非常に薄い。底面と口縁端面には貝目が残されている。17世紀後半から18世紀代のものだろう。口径30.5cm、底径20.8cm、器高は35.4cmを測る。



第7図 蔵骨器(1)



第8図 蔵骨器(2)



第9図 蔵骨器(3)

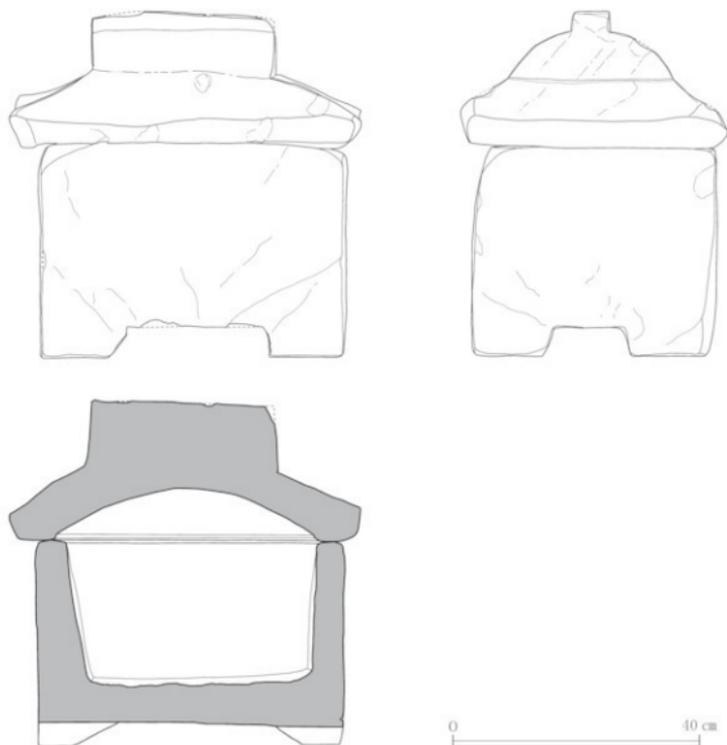
3は断面三角形の口縁部をもつ甕である。内外面には格子目の成形痕が認められる。胴部は外面から穿孔されている。肥前産の可能性ある。17世紀後半頃の所産と推定される。口径24.4cm、底径18.6cm、器高は34.2cmを測る。

4も断面三角形の口縁部をもつ甕である。口縁部がやや外傾した形状を呈する。口径33.2cm、底径27.8cm、器高は34.2cmを測る。

第10図は石灰岩製の石厨子である。墓坑開口部の東側壁に蓋が付いた状態で置かれていたものである。

棺蓋は家形の形状を呈し、内側はドーム状に列り貫かれている。棺との接着部には段差が掘り込まれている。側面はノミ痕が明瞭に残る。

棺は内部が列り貫かれて成形され、明瞭なノミ痕が認められる。内底は調整が粗く、凹凸が目立つ。底面を削り出して脚が設けられている。脚の横断面は五角形状を呈する。幅50cm、奥行き40.0cm、器高58.8cmを測る。



第10図 蔵骨器(4)

(2) 供献品(第11～13図、図版7、8)

第11図から第13図には供献品を掲載している。種類は陶器(第11図1～4、第12図1～3)、磁器(第11図5～9、第12図4～12)、青銅製の煙管(第13図)がある。陶器および磁器の器種は瓶(第11図)、椀(第12図1～9)、猪口(第12図10～12)であった。以下、器種と産地別にそれらの特徴の概略を述べる。

第11図の1から4は琉球産の陶器である。1と2は胴部上位に黒色の釉薬が施された瓶である。胴部下位は球状に膨らんでおり、上位は筒状に整形され、内折しながら口縁部へと至る形状



第11図 供献品(1)



第12図 供献品（2）

を呈している。1は底径5.6cm、器高12.0cm、2は底径6.0cm、器高12.1cmを測る。3は比較的細身の瓶で、底径4.9cm、器高14.1cmであった。4は下膨れ気味の形態をした瓶で、底径5.6cm、器高11.0cmである。

第11図の5、6は中国産もしくは肥前産の瓶である。両者とも底面には1mm大の粗砂が軸着し、内面は露胎となっている。5は底径3.8cm、器高9.6cm、6は口径2.9cm、底径3.7cm、器高10.0cmを測る。

第11図の7から9は肥前産の瓶である。胴部下位と上位、頸部が横線によって区画され、頸部に鋸歯文が描かれている。7と8は胴部に鋸歯文、9は花文が施されている。7は口径3.8cm、底径4.6cm、器高13.0cm、8は口径3.3cm、底径3.9cm、器高13.2cm、9は底径4.6cm、器高13.6cmであった。

第12図は椀と猪口である。琉球産(1、2)、肥前産(3~7)、中国産(8~12)がある。

1、2は琉球産陶器である。1は半筒椀で、外面は胴部下位の屈折点まで施軸されている。口径8.0cm、底径4.2cm、器高5.5cmを測る。2は外反口縁の椀である。内底は輪割ぎされ、畳付は露胎となっている。口径10.4cm、底径4.8cm、器高5.3cmであった。

3は肥前産陶器で銅緑釉が施された製品である。胴部下位まで施軸され、内底は輪割となる。渡辺芳朗氏により内野窯の製品であろうとご教示を得た。口径11.9cm、底径4.1cm、器高3.5cmを測る。

4から7は肥前産の磁器で、4は青磁染付け、5から7は染付けである。4から6は半筒椀で、内底に五弁花の文様が施されている。4は口縁部内面に四方禪文が描かれている。口径7.6cm、底径3.6cm、器高6.5cmであった。5は外面に花文、6は雪もち笹が描かれている。5は口径7.1cm、底径3.2cm、器高5.7cm、6は口径7.7cm、底径4.0cm、器高6.5cmを測る。7は染付けの椀で外面に二重網目文が施されている。内底には重ね焼の目痕が残っている。口径9.5cm、底径4.5cm、器高4.7cmであった。

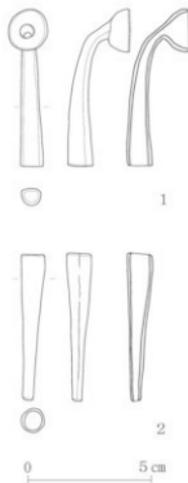
8から12は中国産陶磁器で、器種は椀(8、9)と猪口(10~12)がある。

8は徳化窯産の白磁椀で、外底に重ね焼の目痕が残っている。口径8.7cm、底径3.6cm、器高4.8cmを測る。9は同窯の青花椀で、口径7.6cm、底径2.9cm、器高4.6cmを測る。10は景德鎮窯青花の猪口である。明代末頃のものであろう。口径3.9cm、底径1.7cm、器高2.6cmを測る。11、12は白磁の猪口である。肥前産、薩摩産の可能性もある。11は口径3.9cm、底径1.9cm、器高2.7cm、12は口径4.3cm、底径2.4cm、器高3.1cmであった。

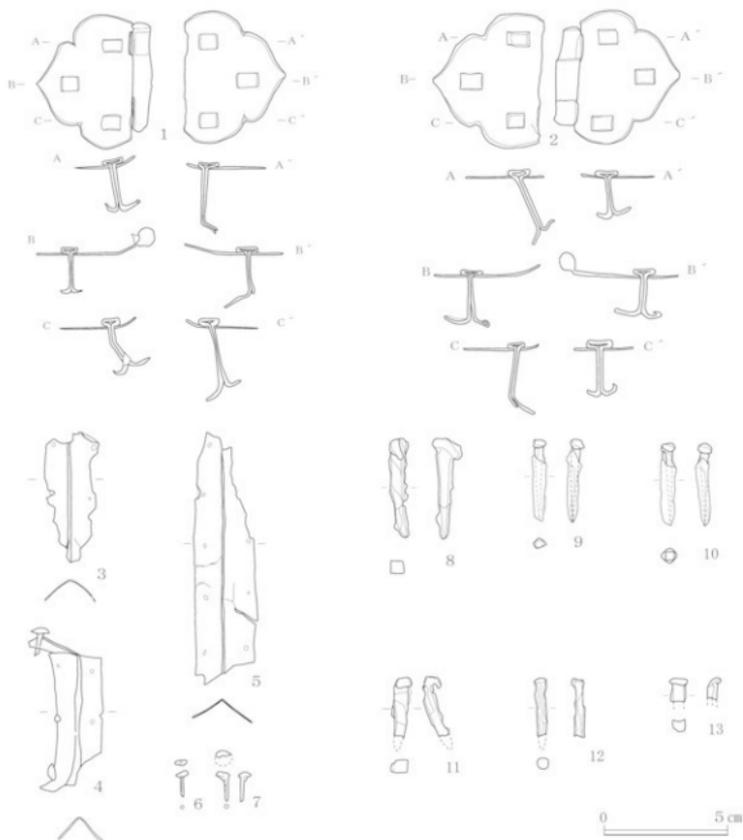
第13図は青銅製煙管の雁首(1)と吸口(2)である。雁首の筒部は断面円形状に成形される。火皿部も同様に円形に仕上げられている。長さ6.4cm、火皿径1.7cmを測る。吸口は側面に鑄痕が残っている。長さは5.9cmであった。

(3) 蝶番、飾り金具、鉄釘(第14図、図版8)

1と2は青銅製の蝶番である。如意頭形にかたどられた平蝶番の形状となっている。木棺や扉などの一部と考えられる。両面に3本の留め金が付けられているが、その長さが不揃いなので、



第13図 供献品(3)



第14図 銅番、飾り金具、鉄釘

取り付け側と扉側とで留め金の長さ異なると判断される。留め金は細い銅版をT字状に折り曲げて釘頭とし、板材に差し込んだ後折り曲げてかえしを設け、板材と固定する仕様となっている。

3から5は青銅製の飾り金具、6、7はそれらの鋸である。飾り金具は、銅版の中央がほぼ直角に折り曲げられ、両裾には鋸穴が穿たれている。厚さは1mmに満たず、非常に薄く仕上げられている。木棺の一部と考えられる。

8から13は鉄釘である。いずれも頭頂部がL字状に折り曲げられた角釘である。9と10には木片が付着している。

4. 中筋川トール墓跡における樹種同定

株式会社 古環境研究所

はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

(1) 試料

試料は、C-4グリッドから採取された木片1点である。

(2) 方法

カミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柃目）、接線断面（板目）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

(3) 結果

分析の結果、マキ属 *Podocarpus* と同定された。以下に同定根拠となった特徴を記し、各断面の顕微鏡写真を示す（第15図）。

マキ属 *Podocarpus* マキ科

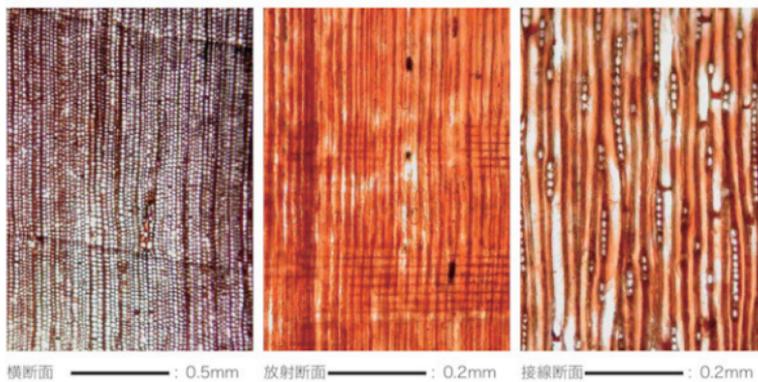
仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面：早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞が散在する。放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は1分野に1～2個存在するが、型は不明瞭である。樹脂細胞が散在する。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で1～20細胞高である。樹脂細胞が多く見られる。

(4) 所見

樹種同定の結果、C-4グリッドから採取された木片はマキ属と同定された。マキ属には、イヌマキ、ナギがあり、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で、通常高さ20m、径50～80cmである。材は、耐朽性が強く、耐水性も高い。建築、器具、桶、箱、水槽などに用いられる。

文献

- 高地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司 1985『木材の構造』永文堂出版 290p
高地 謙・伊東隆夫 1988『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣 296p



1. C-4Gr 木片 マキ属

第15図 中筋川トール墓跡の木材

第4章 中筋川トゥール墓跡から出土した人骨

鹿児島女子短期大学 竹中正巳・下野真理子

はじめに

2006年に鹿児島県大島郡伊仙町日手久中筋川でトゥール墓跡が発見された。この中筋川トゥール墓跡の発掘調査が、2006年12月から行われた。出土した人骨は近世に属すると考えられている。発掘の際に番号をつけて取り上げた人骨の数は、保存状態のよいものから、保存が悪く細片化した骨片まで、400を超える。本稿では、中筋川トゥール墓跡から出土した人骨について、人類学的計測と観察を行った結果を報告する。なお、ここで言及する人骨の計測値と観察結果は第Ⅱ部に反映している。

1. 出土状況

人骨は、頭蓋が大半を占める。保存状態がよく、完全なものも多い。四肢骨は墓跡の3面の壁(奥壁、北壁、南壁)に沿って置かれており、出土数は少ない。墓の中央部に頭蓋があり、四肢骨は頭蓋群の北・東・南面に沿っている。頭蓋は2重に重ねて安置されているため、上段群と下段群の2群に分けられる。上下2群に分かれている理由は、現在のところ分からない。また、頭蓋群の周辺には壺や甕、石厨子も存在しており、それらの中には人骨が納められている。

中筋川トゥール墓跡から出土した人骨は、第2表からもわかるとおり、出土した頭蓋と四肢骨の数が一致しておらず、頭蓋の数が極端に多い。

2. 最終的に本墓跡に納められた人骨の1次葬

中筋川トゥール墓跡に納められた人骨の中で、保存状態のよい頭蓋を観察すると、脳頭蓋中にも、顔面頭蓋中にも土や砂が認められなかった。頭蓋は、上段と下段の2重重ねや、壺や甕、石厨子の中にも安置されているが、いずれに安置された頭蓋中にも、土や砂は認められなかった。これは、これらの頭蓋の1次葬が、いわゆる風葬「屍体を空气中に置いて、腐敗・解体させる葬法」、たとえば曝葬、崖葬、洞穴葬、樹上葬で行われたことを示唆していると考えられる。

3. 出土人骨の性と年齢

人類学的観察を行ったところ、中筋川トゥール墓跡には幼児から老年の各年代の人骨が納められており、特定の年齢層のみが納められているというような大きな偏りは認められない(第2表)。ただ、当時の乳幼児の死亡率の高さを考えると、亡くなった乳幼児の大半は別なところに納められたはずである。おそらく、乳幼児には、成人とは異なる埋葬原理や葬送過程が適用された可能性が高い。

本墓跡に納められた成人個体について調べてみると、男性の方が女性に比べ多い。女性は男性に比べ、老年の個体が多いという特徴もある。これは、女性の寿命の長さによるのかもしれない。

4. 形質

出土した頭蓋について、Martin法に基づく計測、Yamaguchiの方法による顔面平坦度計測および頭蓋形態小変異等の観察の観察を行った。計測と観察の結果を第3・4・5・6・7・8・9・10・11表に示す。また、男性頭蓋について計測値や示数の比較を行った結果を第12表に示す。そして、出土人骨の写真を図版9から16に示す。

頭蓋については、脳蓋は頭長、頭幅、頭高のいずれも、南西諸島群の中で平均値はばらつくが、男女を通じて中筋川に特徴的な差は認められない。南九州本土の近世人と比べると、長頭・低頭には傾かないし、現代人（鹿児島）のような短頭ではない。中筋川ツール墓跡出土人骨の頭蓋長幅示数は78.2と中頭に属す。

顔面頭蓋は、中筋川の顔面の幅経や高径も、南西諸島群の中で特徴的な差は挙げられない。眼窩、鼻部についても同様で南西諸島の近世人集団と大きな差はない。南九州本土の近世人の値や示数と比べると、鼻部を除いて、同じような値を示す。鼻部は南九州本土の近世人の方が狭い。現代人（鹿児島）と比べると、中筋川は低顔・低眼窩・低鼻の傾向を示す。

第12表に示した比較集団の数値を比較すると、中筋川ツール墓跡に葬られた人々は近世に奄美・沖縄諸島（南西諸島中部圏）に居住した人々と同様の特徴を持っている。特に、中筋川に類似するのは、阿三・犬田布の同じ徳之島伊仙町内の近世人である。

5. 古病理学的特記所見

中筋川ツール墓跡に葬られている人骨に殺傷痕の痕跡は認められない。以下に、本風葬墓から出土した人骨で確認された病気や先天異常を記す。

・16-1号頭蓋（男性・熟年～老年）前頭骨病変（図版14の2）

本例は、眉間上部の緻密骨が病的な影響により薄くなっている。前頭洞に何らかの病変があり、このような骨改造が生じている。本人骨には左上顎洞や左篩骨洞の穿孔も認められる。前頭洞、篩骨洞や上顎洞など広い副鼻腔に広がった疾患による影響の可能性もあり、疾患の診断には今後の詳細な研究が必要である。

・35号頭蓋（男性・熟年）骨腫（左頭頂骨）（図版15の1）

左側頭骨に直径約10mmの円形の骨膨隆が認められる。骨膨隆は周囲との境界は明瞭である。骨膨隆の表面は比較的なめらかである。

良性の骨腫は古人骨でもっとも頻繁に遭遇する骨腫瘍であり、清野・星島(1922)をはじめ多数の報告例がある。清野謙次は、岡山県津雲貝塚や大阪府国府遺跡出土の頭蓋に認められた良性骨腫を報告している（清野・星島:1922；清野:1949）。津雲貝塚の例は熟年男性頭蓋で左乳様突起基部に出現した小指頭大の腫瘍であり、国府遺跡出土の例は老年男性の前頭部に存在する大豆大の腫瘍で、いずれも頭蓋外板上にできた境界明瞭、表面平滑で典型的な良性骨腫である。

鈴木(2002)によれば、良性骨腫は主として成人に出現し、女性よりも男性に多く出現する。臨床的発症年齢は40～50歳代とされているが、古病理学的には20歳代の人骨にも往々にみられる。骨腫はその大部分が頭蓋に出現し、なかでも頭蓋外板で緩徐に成長する境界領域の鮮明な円形かつ扁平な形態を示す“ボタン様”骨腫が多く、原発性骨腫瘍であるという。また、頭蓋外板に出現するボタン様骨腫の大きさはさまざまで、大部分は直径1cm以下のもの、時には1～2mm程度の極めて小さい（しかし肉眼的にも明確に骨腫瘍と判定できる）

ものが多いが、時には頭頂骨や側頭骨などに大型の直径（長径）10cm以上におよぶ巨大骨腫として出現するものもあるという。

本例も男性で、熟年であり、骨膨隆の表面性状は比較的平滑であり、原発であること及び発現場所をあわせて判断すると、この骨膨隆は良性骨腫と診断できる。骨腫は無痛性の特徴とされており、発生原因は不明である。本人骨も生存時は痛みを感じてはなかったものと思われる。

・44号頭蓋（女性・壮年後期） 埋伏過剰歯（上顎右側口蓋）（図版15の2）

本人骨の上顎右側の硬口蓋部に歯が埋伏している。この埋伏歯にはエナメル質が認められる。歯列中の歯槽から、この埋伏歯は過剰歯と考えられる。エナメル質側の端は後方を向き、歯根側の端は前方を向く。

・Ko20-2号頭蓋（女性・壮年後期） 口蓋裂（図版16の1）

本人骨の口蓋部には、骨が認められない。切歯孔から後方の部分の骨形成が認められない。これは発生学的にいわゆる二次口蓋といわれる部分の先天異常（発育・成長不全）である。口蓋裂における機能障害として、1. 顎顔面の形態異常、2. 哺乳障害、3. 言語障害、4. 顎発育障害、5. 耳疾患および聴力障害、6. 精神的・心理的障害などがある。本例はきちんと成人した例であり、稀な例である。

・62号頭蓋（女性・壮年） エナメル滴（図版12の2）

エナメル滴とは歯根部における限局性エナメル質形成であり、一般にエナメル質のみからなるもの、象牙質を有するもの、歯髓腔を有するものに分けられる。本例は、小滴状に形成されている。また、エナメル滴のエナメル質が象牙質に潜り込んでおり、エナメル質のみからなるエナメル滴の可能性が高い。エナメル滴は大臼歯の根分岐部やエナメル・セメント境の近くに認められることが多い。本例も好発部位への出現であることがわかる。エナメル滴の大きなものは、歯の萌出を妨げ、埋伏の原因となることがある。本例の上顎右第1大臼歯の場合には、きちんと歯列弓に並んでいる。萌出時のトラブルはなかったものと考えられる。

おわりに

中筋川トゥール墓跡に葬られた人々は、同じ徳之島伊仙町内から出土した阿三・犬田布近世人と最も類似し、ついで近世に南西諸島中部圏に居住した人々に近い。中筋川の人々は、近世に奄美・沖縄諸島に居住した人々と同様の特徴をもっている。

人骨のみから中筋川トゥール墓跡に葬られた人々の出自の由来を確定できるわけではないが、第12表で比較した集団の中で、中筋川の人々は同じ徳之島伊仙町内から出土した阿三・犬田布近世人に最も類似することから、中筋川トゥール墓跡に埋葬された人々は近世の徳之島に暮らした人々、特に墓に最も近い集落である目手久集落に居住した近世の人々と考えられるが、現在の所、最も妥当性が高い考え方であると思われる。

第5章 徳之島・伊仙町目手久の葬地関連調査記録

瀬戸内町立図書館・郷土館 学芸員 町 健次郎

1. 調査日程等

期日：平成20年2月25日～29日

場所：目手久（特に東目手久）

話者：當ナガ子（昭和2年生）・東田ウメ（大正7年生）・松田ウメ（大正5年生）・鎌田哲弘（昭和10年生）

2. 目手久の区画

目手久は伊仙町の集落景観の類にもれず、扇状台地の丘陵上に立地している。集落居住域は谷状の地形を境にして大きく二区分されており、大別して「ニシ」、「ヒガシ」という方位を軸にした呼び方も会話では聞かれるが、基本的にはそれぞれ「アサト」と「ナンス」に言い分けられている。

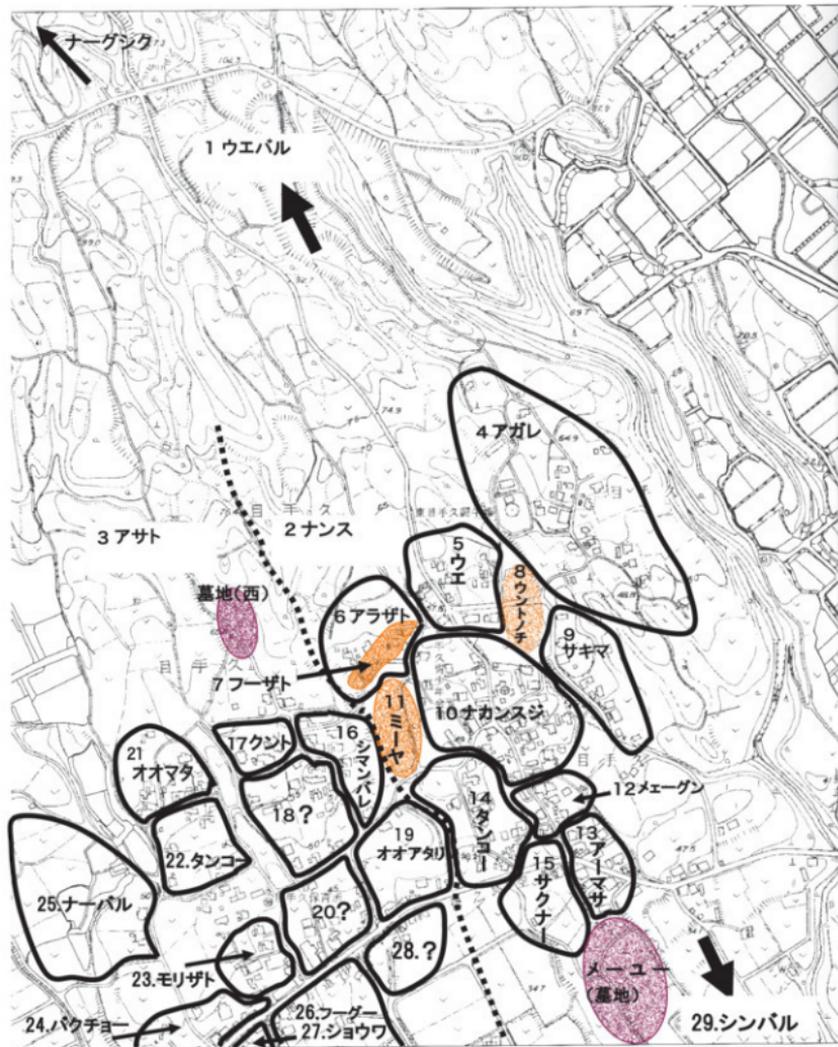
今回の葬地調査に向けての把握すべき事項として、概観をまず知ることからはじめなくてはならなかったが、時間的制約もあり、「ナンス」での聞き取りを行った。「ナンス」とは、地名としてある「ナカンスジ」を略した言葉であろう。

目手久の区画については酒井正子氏が作成した図（以下、酒井図、出典本稿末）があり、たいへん参考になる。

今回筆者の方で作成した図（第16図）の範囲と名称とでは、若干酒井図と違っている箇所があるが、それは後日確認し直す事項として、以下にそのまま提示し、数字番号ごとに今後の調査に向けての備忘録として相違をあげておく。

なお、第17図に示したが、東地区には、戦後につくられた区画名称もあった。東地区で運動会を浜や闘牛場で行っていたときの組み分けで、「ワカクサ組」・「チドリ組」・「ヨグラ組（太陽組）」・「アグレ組」がある。現在は子供の数が少なくなって運動会がなくなったのでこの組み分けが何かで機能しているということはない。

1. ウエバル… 目手久の山手を「ウエバル」と呼び、それぞれの畑のそばに家を建てて生活している人たちがいた。家は5、6軒あった。ウエバルの生活では、水は溜め池を作ったところに元はイジュン（泉）があつてそこから汲んでいた。今はもうない。ため池を作るために壊された。ため池があつたのはは大正7年生が中学3年の頃で、昭和初期のことだった。砂を牛で積んだりしてみんなで総出でがんばった。現在の池はそれに手を加えて大きくしたものである。もとの池をまた広くしてある。位置的に東目手久の上になる。この池付近が人家があつた地帯で喜念の人もいた。目手久のシマから少し離れてはいるものの、十五夜のときは若い人たちは遊びに降りていった。昔は雨乞いもあつたというが、昭和以降はしたことはない。ゲンギンは喜念に入るが目手久の人もお参りする。



第16図 目手久の区画図

2. ナンス……二区分される時の「東」に相当する。「中筋」の意味であろう。
3. アサト……二区分される時の「西」に相当する。琉球列島でいう「アサト」語彙に通ずるものだろう。細かい区分でこの呼び名はない。西を全体さしている言い方。
4. アガレ……「ナンス」の中の一隅。佐弁側に位置。酒井図の調査では南側に「クチョウ」という区画が認められる。
5. ウエ……酒井図では「メマ」とある。二区分されていて山手を「メマ」と記録している。残る部分については未記録。今回の調査では、範囲は同じだがまとめて「ウエ」と聞いた。
6. アラザト……酒井図では「アラザト」と「フーザト」は別区画として記載されている。今回の調査では「アラザト」の中に「フーザト」があるとの教示を得た。位置はほぼ同じ。
7. フーザト……同上。シマでは「フーザトヤシキ」と呼んでいる。大きな家（守家の先祖）があったと伝わる。
8. ウントノチ……漢字表記すれば「上殿地」の意。酒井図にはアムトの表記がある。どのアムトか不明。
9. サキマ……「サッキマ」とある。区域は同じ。岩本家の本家があった場所。
10. ナカンスジ……「ナンス」のうちで「アガレ」を除いた範囲を「ナカンスジ」という。今回の調査では狭い意味でこの一帯をさすとされた。酒井図では、更に細かい区分が示されている。
11. ミーヤ……土地の区画呼称というより、屋号的な扱いに近いが、面積が広いためにここに含めておいた。酒井図からははぶかれている。竹家の本家があった場所という。凡そ百年前は家があったという。藩政時代のミーヤは女中をたくさん使い、フーグという田袋まで米のとき汁が流れるほどだったという。屋敷周りは石垣で囲まれ、敷地一帯は舟の形をしていたという。現在のミーヤは荒地。
12. メェグン……事実かどうかは別にして、メェグンに住む人々は金持ちが多かったとの評価も聞かれた。
13. アーマサ……向井家がある付近をさす。酒井図ではかなりせまい範囲をさしている。「中筋川トール墓」を使用していたのはこの地区に住む人ではなかったかといわれていることから今後、直接話を伺う必要がある。
14. タンコー……酒井図と相違点はなく範囲は一致。



第17図 戦後・東目手久の運動会組分け区画

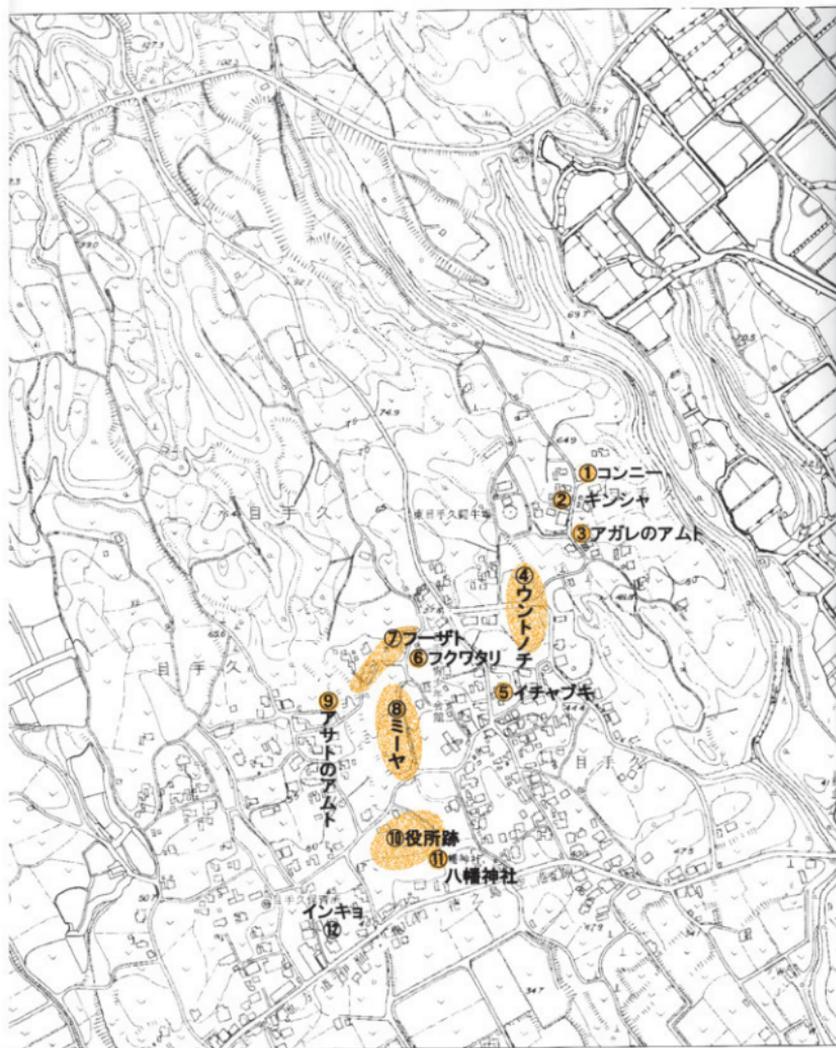
15. サクナー …… 位置のずれがある。酒井図では神社側を囲ってある。

《以下、西の区画》

16. シマンバレ …… 酒井図では「西」を更に二区分するときの呼称とある。狭義の地名としても使われるの未確認。今回示されたところを酒井は「前当りンバレ」、「後ンバレ」と記録してある。18.の土地と区画そのものが違っているようである。
17. クントー …… 酒井図では「コント」と記録されている。位置が道をはさんでずれているとみられる。
18. ? …… 酒井図では「大殿地」とある。
19. オオアタリ …… 酒井図では「アガレンスー」とある。神社近辺の区画は、今回の調査を酒井氏の記録と照らすと、「オオアタリ」という区画がかなり広い言い方だということがわかる。「アサトウシモ」の区画も少し入っているようである。
20. ? …… 酒井図では「シモンバレ」とある。
21. オオマタ …… 酒井図では「イリンウスジ」、「ウエンバレ」とある。
22. タンコー …… 酒井図ではアサトを二区分した言い方のひとつとして記録されている。ここで図示した範囲の記載はない。
23. モリザト …… 酒井図によると、範囲はもっと広いようである。
24. バクチョー …… 酒井図では「モリザト」との間に「イフザト」を記録してある。
25. ナーバル …… 昔は家がちらほらあったという場所であるという。酒井図では表記なし。
26. フーグー …… 酒井図には「メーザト」とある。
27. ショウワ …… 酒井図になし。
28. ? …… 酒井図では「アサトウシモ」。
29. シンバル …… 県道より下にある家をまとめてそう呼んでいる。山手を「ウエバル」と呼んでいる感覚に近いようである。よって「上」に対する「下」の原ということか。家が建ったのが新しいという「新」の意とも考えられる。

その他、屋号的な語彙も得られたので、信仰対象の地とあわせて図示(第18図)しておいた。

1. コンニー …… 由来不詳。
2. キンシャ …… 當家本家位置。沖永良部がみえる大きなガジュマルがあったという。これについては、アガレの鍛冶屋をしていた先祖を祭るカンジャの本家跡には、目手久一大きなガジュマルがそびえ、遠く沖永良部からも傘をさすようにみえる、との伝承を酒井氏が記録している。
3. アガレのアムト …… アガレのアムトの横には力石がある。年配の方の話では昔はこれで力比べをしていたらしいという。アムトはナンスにないが、アガレにはあるという。アガレ付近は當姓が多い。當の本家は當トシオの家で、「ウワンダ(上田)」と呼んでいる。
4. ウントノチ …… 道路をはさんでいる。元、八幡神社があったところ。
5. イチャブキ …… 由来はおそらく、「板葺き」の意味からだろう。郵便局のところ。茅葺時代に板葺き屋根にしたことによるのではないだろうか。いわゆる、コケラ葺きのことだ



第18図 その他、目手久の空間呼称位置

ろう。ここを基点に、前の家々を「ムエー」、後ろを「クシ」、西側を「イリ」、東側を「アグレ」と呼んでいたという。これに関係するのだろうか、酒井氏は「ナカンスジ」の西北がフーザト・アラザト・フクタリに細かく分かれているのは、土地所有者（守）の分家による。本家は「イチャブキ」の屋号」と記録している。

6. フクワタリ…酒井図では区画呼称として出てくる。今回は一軒の家をさすといわれた。由来不詳。
7. フーザト…酒井図がさす家と同じか不明。今回の調査では守家をさすと聞いた。
8. ミーヤ…区画呼称の欄に記載。
9. アサトのアムト…今回は写真撮影のみ。
10. 役所跡…役所のあとは、今の八幡神社の後ろから横の一帯になる。そこに昔は郵便局があったという。そこから面縄に一旦移転し、また戻ってきて今の位置にある。
11. 八幡神社…八幡神社は最初はソース（酒井氏によると上原にあるという）にあった。そこから「ウントノチ」に移り、さらに現在の東西ほぼ中央に鎮座することになった。三度移転している。現在地への移転は、昭和の早い時期になされた（酒井氏は大正15年頃と記録されている。）「ウントノチ」に八幡神社があった頃のことは、年配者が小さい頃におぼろげにみた記憶があるという。ウントノチは一軒の家ではなく、この辺という感じの地名。守島家の敷地だった。鳥居も作っており、「花のつもり〜」と大和の唄を歌って踊っていたのを覚えているという。神主はメエーグンの向井清盛という人だった。祠を作ったのは話者の松田氏の祖父・松田富勝だった。松田富勝は藩政末期生まれの喜念出身で有名な大工の棟梁だった。面縄の郵便局を建築したのもこの人物という。そこから現在地になぜ移転したか理由については伝わっていない。ウントノチは今木が繁っている場所となっている。そこでは雨乞いも行われたことがあるという。八幡神社の移転は、おそらくは軍国化の空気と無関係ではあるまい。戦前は前を通るときは必ず直立不動で一礼したという。戦後、一時荒廃したというのも軍国の意味を失った空間によくみられる経過である。
12. インキョ…由来不詳。酒井図になし。一軒の家をさす。

3. 文献ノート

1. 仲松弥秀「徳之島探訪一特に伊仙町域」

（「地域研究シリーズNo6 徳之島調査報告書(1)」 沖縄国際大学南島文化研究所 1984）

昭和41年より伊仙町調査をはじめた仲松の記録中には、面縄のアジ屋敷に関する記述がある。目手久にある二つのアジ屋敷と人骨の関係をみていくうえでも参考になる。踏査記録によれば、面縄のアジ屋敷は聖地としての意味合いが感じ取れるだけでなく、人工的な石積みが残っているとあり、この場所には二、三の頭骨が残っており、古老の話ではいつの時代か火葬されたという伝承を得ている。

他に注意しておきたいのは、面縄の「ウスクンシャー」に関する聞き取りである。現在は完全に消失して幅広い道になっているというが、元はそこは祭場であったという。「現在のところに面縄村が形成された時代からは拝み山が遠すぎることから、ヒヤー家の背後約200m隔てた樹

林茂る丘(ここにノロ墓があるとのこと。拝泉ソーゾーと通ずる)より遙拝したといわれる)として、ウスクンシャーはその祭祀の順路のひとつであった。ウスクとは樹木のアカウのことで、その大木があったという。祭場の地形が「長さ約20m、中ごろの幅約7mの伝馬船型であった」というのも、後述する目手久の「ミーヤ」をめぐる断片的伝承にも通ずる。

また、目手久の記述もある。東目手久のアジ屋敷そばのソーゾーの泉が流れる深い谷壁には多くの人骨が収納されたツールがあるという。西目手久の上のアジ屋敷(ナークスク)とフカソウの泉にもふれている。仲松が調査した時点で、すでに感触として、「村人のほとんどは、この山手遠いアジ屋敷の場所を知らない」と述べていることは、筆者による聞き取り調査情報量の少なさが今にはじまったことではないことを示している。

目手久のアジ屋敷と古い村落位置について、仲松は次のように締めくくっている。「西側のアジ屋敷は深込に挟まれた関係が、保存されていたが、東のアジ屋敷が在ったと推定される八幡神社跡は見ることが無く掘り返されて畑になっていた。おそらく東目手久の祖先は東側のアジ屋敷付近に、西目手久の祖先はフカソウ付近に各々村を形成していたと考えることができるであろう」。

2. 平敷令治「上面縄の葬墓制」

(「地域研究シリーズNo.8 徳之島調査報告書(3) 沖縄国際大学南島文化研究所 1985)

平敷によって調査された目手久の東隣に位置する面縄の記録は、目手久の墓制変遷を探るうえでも大変参考になる。上面縄における岩かけや岩穴を利用した古墓(「平敷はツールと表記)は数箇所に分散して存在しており、そのうち「大里の岩かけ墓」と「東半田の岩かけ墓」では、散在していた骨を大正十年頃にまとめて焼いたという(ただし火葬場が当時はなかったため、どのような考えと方法で焼いたかは不明)。しかし、「アストツール」は明治の初め頃まで利用し、「古里」は調査当時まだ利用されていたとあることから、同じ集落内であっても、古墓によって墓の空間位置の変化はまちまちであったことを伝えている。

また、「近代にはツールのコースガナシ(人骨を敬った言い方)はナワチブル、すなわち沖縄人の骨、それも慶長14年(1609)の島津氏の琉球征伐の際に戦死した沖縄人の骨、といわれるようになった」、あるいは「三味線の音が聞こえてくるムンバチワラ(物の怪の出る所・幽霊の出る所)」という伝承が古墓に付随していることは、目手久の古い葬地に付随して聞かれる伝承と一致した要素であることを確認できる。ちなみに、水野修によれば、この上面縄の話は、『徳之島採集手帳—徳之島民俗の聞き取り資料』鹿児島短期大学付属南日本文化研究所 1996 136頁)。

平敷は墓の類型として、岩かけを利用したツールに石塔墓が建っていく推移についてもふれている。上面縄の石塔で最も古い年代は、宝永8(正徳元年・1711)年であり、銘が入った石塔の多くの被葬者が地方役人やその妻であり、鹿児島県の山川石を用いていることから、「古津藩士の造塔習俗に接し、更に1736年に安住寺が建立されるに及んで、先ず与人に地方役人の間で造塔が始まったのであろう」と述べている。これは後にふれるが、目手久においても認められる傾向といえる。

また、法名については近代のものにはないことから類推を深められており、個人の墓碑から家の墓碑への転換期が大正末期から昭和初期にかけてであろうという。

4. メーユー墓地の成立過程

(1) 明治初期のハナサキ

現在、目手久地区で使用している墓地は、東目手久が県道下(海側)の通称「メーユー」の墓地に、西目手久は、特に名称はないが、西目手久宅地域の山側に集合墓地を形成している。

ここではメーユーの墓地地域の形成について、得られた聞き取り資料を元に整理しておくことにしたい。

そもそもメーユーがどのような地であったかについて伝承は得られない。シマの海側の小高い段丘を成しているメーユーは、現在の居住者からすれば墓地という空間認識しかないといった状況である。ところが、1985年頃に目手久を調査した酒井正子氏の聞き取りによれば、かつてのノロ祭祀の聖地であった痕跡が次のように書き留められている。

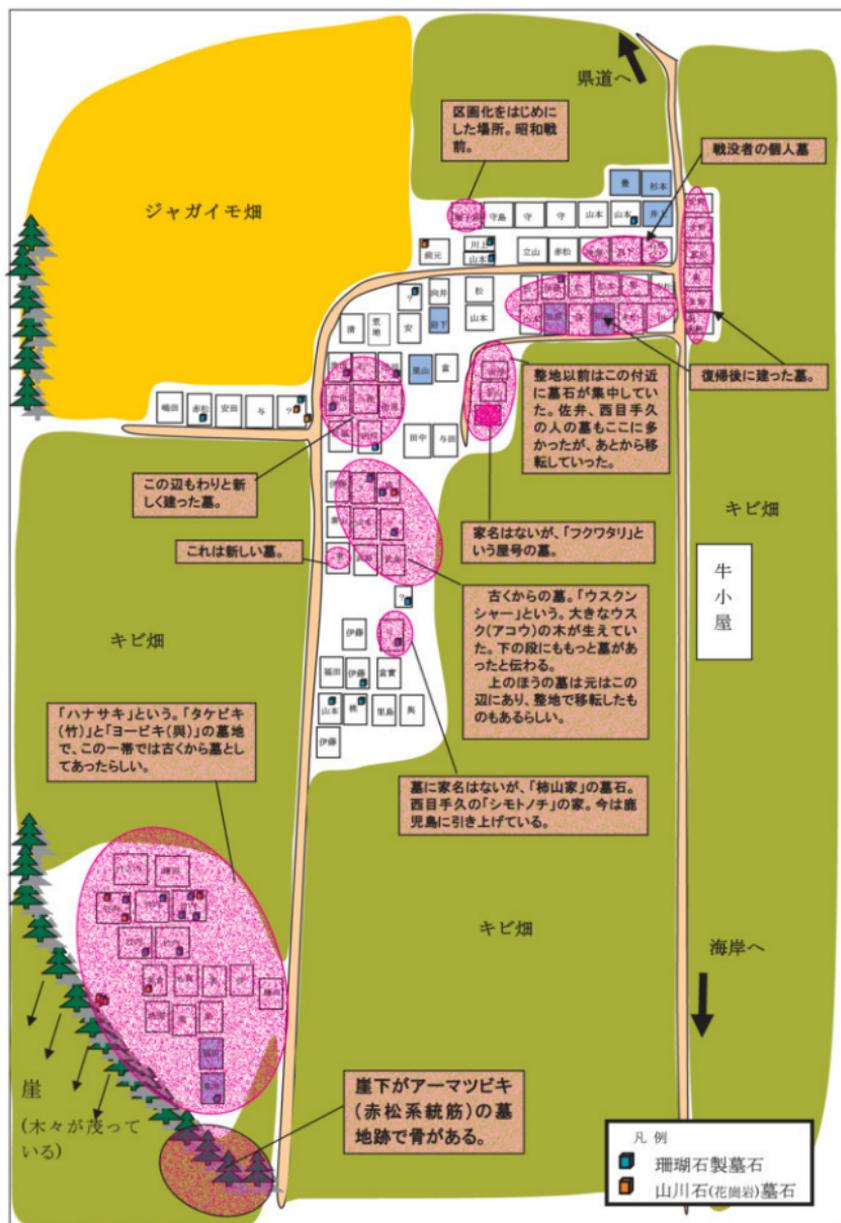
「明治初期までであった話として、東のアジヤシキで何か祭りをした人達がメーユーのチヂ(小高い丘)の広場まで降りてきて、そこで4、5人の人が迎えてシューギを供えて踊る。それから初めて集落内に降りていって御神酒を各家に回して安全祈願し、アムトの近くの広場で人々は八月踊りをした。(中略)アジヤシキにまつりに行く人も広場で迎える人も、男女ともすっぱだかで越中ふんどしを締め、ススキを持ち裸踊りをした。(中略)特別な家柄の人達、主に女が行ったらしい。(中略)30坪ぐらいの広場で、まん中に平たい自然石を置き、階段があり、周囲に石が10数個囲んであった。松の木やがじゅまるがうっそうと繁る寂しい感じの所で、ケムンワラ(妖怪の出る場所)と言って人は寄り付かなかった。年寄りには神様の踊り場所だから大切にしろと言っていたとのことである。(酒井 60頁)」

このように、「特別な家柄」、「主に女」、「神」、「ススキ」といったキーワードから察することができるのは、かつてのノロに神女に関わる祭祀の姿で、聖地としての空間認識である。それが、酒井が調査した時点で神石の存在をかるうじて伝承を得ていたものが、現在ではそれも消えて墓地認識のみとなっている。これにはどのような変遷があったのだろうか。

今回の筆者の聞き取りで得られたのは、メーユー墓地の由来として、最初に墓石が立ったのは「ハナサキ」であったということである。ハナサキは、メーユー墓地地域の海側に区画が離れた一帯である。そこに墓を持っているのは、第19図に示すとおり、「竹之内」、「竹内」、「鎌田」、「奥倉」、「興」、「桃園」、「名真」、「伊」、「福田」、「東田」の苗字を持つ家である。

中でも最も多いのは「竹」が付く苗字であり、これらは元は「竹」姓であった。鎌田もその一族と伝わる。「竹」がつく姓は「タケビキ(竹の系統)」とよばれ、藩政時代の役人を務めていた家柄であったと語られている。

竹家本家は東の「ミーヤ」とよばれる敷地にあったらしい。「ミーヤ」には、家があった当時の当主であろう、竹源三という人が住んでいたという。家が無くなって百年あまりになるという。家には手水鉢などの調度品があったというほか、「ヒダリヤ(左屋)」という目手久では他にない作りで、床の間は普通の家と違って、左手に床の間があったという。藩政時代のミーヤは女中をたくさん使い、フークという田袋まで米のとぎ汁が流れるほどだったという。屋敷周囲は石垣で囲まれていて、敷地一帯は舟の形をしていたという。現在のミーヤは今は荒地となって通れなくなっている。このように云われが伝わっているからか、誰も怖がってさわらずにそのままにしている。その近くには「フーザト」という宅地跡が一軒あり、今は誰もいないがそこは守家であっ



第19図 目手久(東目手久)／「メーユヌチ」付近の墓石配置概略

た。シマでは「フーザトヤシキ」と呼んでいる。とにかく大きな家があったと伝わる。

また、ハナサキには「興」姓も多く集中している。今回は「竹」と「興」の家柄の関係性について情報を得ることはできなかったが、興系統の墓石の脇に薩摩から運ばれた山川石の古い墓石が積まれていることからすれば、「興」も「竹」と同じように藩政時代の役人層を輩出していた家柄と目される。「興」の系統を「ヨー(興)ビキ」という。ナンスの「ウエトノチ」近辺に家が広がっていたというし、戦後の運動会の組名でも「ヨグラ組」と呼称がついたほどである。昔から墓はハナサキにあった。現在この姓を名乗る家は少なくなって何軒もない。名真家もヨービキだろうと目されている。名真家の墓は、元々目手久の外にあったものを移転してきたものであるという。

残る「桃園」、「名真」、「伊」についても今後聞き取りをすべきだが、区画として「興」に關係していると現段階では予想する。「伊」の墓も昔からハナサキにあったという。目手久の伊藤姓は元は「伊」だったという。一番海側に位置する「福田」下久志、「東田」は井之川からそれぞれ移ってきた家で、区画内では最もあとから墓石を立てられたという。

以上のことから、ハナサキの一角は、元は藩政時代の役人を務めていた家柄の墓地域であったと目される。今後の調査で、建碑年代をしっかりと確認していくと藩政時代末といってもある程度は年代が出てくるだろう。隣の上面縄の石塔で最も古い年代が、宝永8(正徳元年・1711)年で、銘が入った石塔の多くの被葬者が地方役人やその妻で、鹿児島県の山川石を用いているという平敷令治の調査からすれば、およそその頃と前後する頃だろうと予想はされる。ちなみに、ハナサキとは、メーユの丘から延びる稜線の突端に位置することから、漢字で理解するとすれば「鼻先」の意であろう。

周囲には現在は一本のみ、まざまざの大きさの松があるが、昭和初期は数本あったという。大島に認められる傾向として、藩政期に役人を輩出した墓地には植栽されたとみられる松があるが、その共通性からしても、ここは役人を輩出していた家柄の墓地域として早くに成立した区画といえる。いわば薩摩の影響を受けて、目手久では最も早くに石塔を取り入れた区域といえよう。

そこで先の酒井による明治初期の伝承を含めて考えると、メーユの小高い一帯は、少なくとも明治初期頃はうっそうと樹木が繁る森状の丘で、特に頂近くは広場を成して祭祀に関わる聖地であった。そこから少し離れた海側の低い丘陵の突端は、薩摩式に石塔を持ち込んだ役人筋の墓所が形成されていたとみられる。伝統的祭祀に関わる聖地と、新たに石塔文化を持ち込んだ家柄の墓所がメーユの一帯に同居していたわけである。それからの目手久の近代は、祭祀が廃れて聖地性が忘却されていき、同時に石塔文化は目手久全体に広がっていった。各家の石塔は元からあったハナサキの墓所に近いところに少しずつ増え始め、メーユの地は、現在のような墓地空間となっていた。

(2) 昭和期のメーユをめぐる凡その経過

次に、昭和に入ってからメーユ墓地の広がりについて情報を整理しておきたい。

戦前、昭和10年頃の記憶を話者から何うに、当時のメーユはまだうっそうとした森であったという。そのなかにサング石を用いた石塔が、本家筋のものだけが、少しだけあったりまばらに建っていたという。なかには石塔を建てずに目印に石だけ置いている家もあった。当時は本家の石塔を中心に埋葬をしており、墓の近辺の敷地がせまいと改葬骨を掘り出せないぐらいであったという。この頃は、まだ本家も分家もほぼ一緒のところに埋葬していた時代であった。

また、当時の葬式では、現在の散髪屋付近で、霊がわからないように棺をぐるぐる回していたことが記憶されていることから（この儀礼は戦後は消えていった）、メーユ一の葬地利用は昭和初期段階は確実に始まっていたといえる。

昭和以前の様態は今回の聞き取りでは全く伺えなかった。親元を同じくするもの、兄弟といった親族関係で、まだ当時はある程度一族単位の固まりで埋葬していたと伝承されているが、空間の時代変遷は、もうすでにたどることができない。

昭和10年代の時点でも分家が少しずつ増えていたことで、まとまりがわかりずらくなっていたという。戦後すぐの頃はまだ石塔は少なかったらしいが、復帰前後の頃から分家が多くなり、メーユ一の高いほうから順に区画整理化されていった。現在の墓地区画に親族単位のまとまりについて、人によってはだいたい血が近い同士が近くにあるという方もおられるが、厳密にまとまりを認めることは難しいという。

メーユ一の墓地で区画整地をはじめたのは、種子島家が戦前昭和期にしたのが最初だとされる。それまでも墓地としてあったが、敷地を囲うのはその近辺から広がっていったという。種子島家もそれ以前からメーユ一に石塔を建てていた。

現在の墓地は小高い丘の頂を中心として広がりを見せているが、伝承で得られるかざりで石塔が多く建っていた場所は、むしろ、その下の方のハナサキに向けた側であったという。墓石が集中していたのは、図に示した如く、「安達」、「幸山」家の墓がある付近であったという。そこは東目手久のみならず、元は佐弁と西目手久の人の墓もここに多かったようだが、後から移転していった。佐弁や西目手久への移転は一斉になされたのではなく、家単位でそれぞれの事情で少しずつ移されていったという。現在、西目手久の上にある集合墓地（付近は生活用水を汲む場所だったという）も戦前から石塔があったようで、そこに西目手久の人は集合する形で移転していったといえる。

移転は、特に戦後に激しく動いた感があるという。下がっている場所にあったので、佐弁や西に移転したほかは、皆上へ上がりたがって移転していった。下一帯は特に呼称はなかった。今回話を聞いた方々によれば、感触として、メーユ一の高い場所に墓を持つ家のほうが、どちらかというと分家であったりして新しい感じがするという。

また、その海側の「ウスクンシャー」とよばれる付近も集中して墓石があった地帯であったという。「ウスク」とはガジュマルに似たアコウのことであるが、その大木が一本あったという。その下に低い土地の方まで墓石がひしめいていたらしい。武島家の墓は元からこの地にあったという。西の「シモドノチ」の柿山家ももともとそこに墓があった。メーユ一の頂付近にある墓も、この付近から上に移転していったものが少なくないという。

現在、菊家の墓地がある一帯はもともと菊家の畑地だったが、復帰後に各家に切り売りされて墓地となっていた。

火葬場ができるまでは土葬であった。目手久では遺体を座棺に納めていた。座棺に納めるには、慣れた人がしないと座りが悪くなる。目手久では埋葬後に数年して掘り起こして骨を洗うが、その改葬も手馴れた上手な人がないと、のど仏が取れなくなる。遺体を斜めにして納めると、掘り起こすときに頭が落ちてしまって取り出しにくい。

昔の改葬は入れる容器がないために自分の家の水かめに白いさらして頭骨を包んで入れることが多かったのだが、上から土や水が入った。蓋はつけても無くなったりした。

今は全部火葬にして、火葬場で売っている壺に名前を書いて納めているので、骨を持って帰っ

てくると、石塔の下に骨を納める空間があるのでそこに入れている。家によっては、墓の後ろに別途小さい場所を作って骨を入れているところもあれば、石塔の後ろに埋めているところもある。

「コースバコ(先祖箱)」という骨を入れる箱だけを置くのは、昭和五十年頃から最近の流行である。目手久で「コース」といえば先祖のことをさす。今はセメントで四角く作っている。火葬骨の壺を石塔の後ろに埋めている人もいる。

終戦後、若い人たちが売ったら金になるといって甕を取っていく人もいて、西目手久のどこかの家のものには、値がするツボがあったとか、噂が流れたことがある。

三十三年忌が過ぎた頭骨は昔からそのままにしておいていた。三十三年忌が終わると霊は天に昇るとして、頭骨を土中に埋めてその上に小さな五輪塔のような石塔を立てる人もいる。

5. 目手久の葬地について

(1) 聞き取り資料

今回の調査で耳にした葬地に関わる伝承は以下のとおりであった。

【シヨンミチ】

「シヨンミチ」という場所は、昔は神が通る道といって、夜遅く歩くとヒューヒュー音がするといっていた。ムンバチが聞こえる場所でもある。負けそうになったら鶏を鳴かせて、霊を追い返した。シヨンミチは昔そんなことがあったという。

【ナハドゥル】

ナハドゥルには、壺とカラカラ(酒入れ)が落ちていやすい。「ウトルシドー(恐ろしい鬼)」とされて人が足を運ばない怖いところ。夜中に「ムンバチ(物ばち)」という三味線の音が鳴り響いてくるともいう。人骨はないらしい。ムンバチは、目手久と佐弁との間のサク(迫)でも鳴るらしい。

【アジドゥル】

今回の話者が女性だったこともあって、アジドゥルについては、男の年配者に聞いた方がよいだろうということであった。

【アジヤシキ】

「アジ屋敷」という所もウトルシドーで木を切ってもいけないとされる。アジ屋敷は、西目手久の山手、フカソーの付近にあるという話で、言葉は聞いて知っておられるようだったが、足を運んだことはないという。

【アーマサビキ】

「アーマサ」と呼んでいる場所が県道を越えたメーユの近くにある。向井家がある一帯である。詳細は不明。鎌田哲弘氏によれば、いわゆる「中筋川トゥール墓」は「アーマサ(向井家)ビキ」の墓所ではないかとのことであった。ただし、そこでの葬儀が記憶されている前元家はアーマサビキではないらしい。

【ウチニヨー】

「ウチニヨー」は、西目手久の今の墓地と近いところにあり、中筋川トゥール墓の西側横、次の筋にある。大昔、沖繩と戦争して、そのときに死んだシマの人の骨があるところがあるという。ほばアサトとナンスの（西と東）の境に位置している。そこへ戦時中に疎開していた人たちもいた。その付近は竹の子があるので、女の人もわりと行っているが、骨があるところまで入っていない。

ウチニヨーは、メーユー墓地よりも古い葬地という。

【中筋川トゥール墓】

この洞窟より少し下の方に墓が一つあった。その付近も「ナンスゴー」という。東をさす区画呼称として「ナンス」というが、古墓がある一帯の畑も含めて「ナンスゴー（中筋川）」と呼んでいる。

古墓のところで、昭和5、6年頃、で前元家の葬式が行われたのが記憶されている。昭和10年生の鎌田哲弘氏によれば、子ども時代にその付近で遊んだことがあり、東目手久の赤松家や前元家の墓石があって、人々が墓参りをしていたのも記憶があるという。当時はリュウゼツランが付近に生えていた。

終戦後、まだ5、6軒は石塔が残っていて、そこの前で土葬していたという。赤松姓の方、前元孝則氏の祖母が葬られていたということから、アーマサビキで使用していた墓ではないかと鎌田哲弘氏は語られた。他に、「松」家の墓石もあったという証言も聞く。西目手久の人の墓石はなかったのは間違いないようである。

そこはオトロシドーではなかったので、子どもたちは、墓参りする人々から卵焼きなどの供え物のおこぼれが貰えることを目当てにしながら風揚げなどして遊んでいたという。

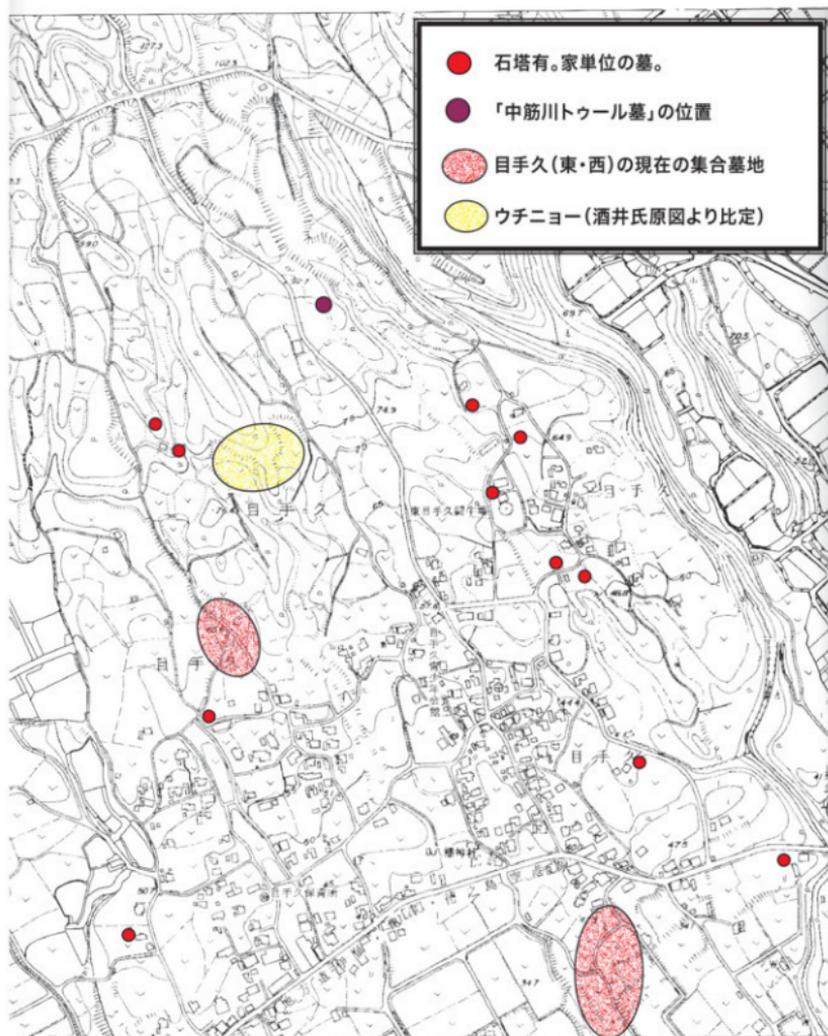
アーマサに居住していた人々、向井ビキの人々、メーグンに居住していた人々の墓がこの付近にあり、後に皆メーユーに移っていったという語りもある。

【アーマツビキの墓】

ハナサキの現在松がある下には大きな岩があり、そこをアーマツビキの墓所という。アーマツとは、「赤松」という姓をさし、その一族系統の墓をさす。そこは洞窟状になっていて人骨がたくさんあった。近年、遺族がその穴をコンクリートで塞いだという。コンクリート工事の風景を見た人の話では、赤松の何とかという文字が書いてあったのを記憶しているという。赤松のコス（高祖）がある墓と伝わる。何体の骨があったかは不明。具体的な内部の様子や使用年代など詳細は不明で、酒井氏の論文にも出てきていないため、継続した聞き取りが必要である。

ここを塞いだ赤松本家とみられる家は大阪に引き上げてシマにはいない。「アーマツビキ」にあたる家の分家した墓は、メーユーの場所地内にくつ分かかれてあるという。現在の東目手久で一番数として多いのはアーマツビキの家ではないかという。

「メーユー」という地名語彙の意味が不明だが、もしかすると丘の海側にアーマツビキが利用したような大きな岩があることから、「メーイヨウー（前岩）」の意味ではないだろうか。



第20図 目手久の墓地関係位置(山手のアジドゥル・ナハドゥル・ナーグシクは除いている)

(2) 人骨がある地点についての備忘録

以上の伝承を酒井の記録と照らしてみると、およそ30年の経過で伝承もかなり薄れていることがわかる。また、酒井の調査では出てこなかった墓所として、「中筋川トゥール墓」と「アマツビキの墓」が出てきた。問題は、葬地変遷のなかでこれらがどの時代に位置づけられるかという点である。結論的なことは、今回の調査では不十分で出せそうもないが、今後の調査に生かすために目手久全体の葬地空間(第20図)を俯瞰しておくことにしたい。

まず、崖下、岩穴に骨を置いている二次葬(一旦、土葬・風葬したのち、洗骨などによって骨の安置に手が加えられているもの)の痕跡がある場所は、酒井の記録を整理すると次の箇所があげられる。正確な位置の特定と確認踏査は今回行っていない。

- ①ナグスク (「西のアジャシキ」ともいう。下に人骨がある洞窟有との事。ムンバチ伝承有。西側に位置)
- ②アジドゥル (風葬跡。ムンバチ伝承有。西側に位置)
- ③ナハドゥル (「東のアジャシキ」の下。骨が散らばる洞窟有。ムンバチ伝承有、ナハムンバチはここだけ。東側に位置)
- ④佐弁との境の谷 (サベンゾーの付近に風葬跡。骨が多い。ムンバチ伝承有。東側に位置)
- ⑤ウチニョー (東西の中間背後に位置。大きな深い鍾乳洞で昭和2年当時で約3千体。1800年代頃まで使用との伝承有。入口には頭骨が30個ほどある。奥は塞いであるとのこと。ムンバチ伝承なし。)

酒井はこれらの葬地が語られるなかで、ムンバチ伝承が「ウチニョー」だけではなく、他と区別される意識が感じられると記されている。ところが、筆者の調査段階では、ウチニョーも沖縄人とつなげて語られ、伝承がすでに交錯をはじめていた。これは誰が祭っていたかははっきりしている葬地は怖い対象としてはあまりみられず、遠くなればなるほど恐れられる傾向があることを示しているのではないだろうか。目手久の場合はメーユー以前の墓地がウチニョーであったことがはっきり伝わっていたのでまだムンバチ伝承はなかったが、時代が経つにつれてウチニョーも怖いところという意識が生まれていったのではないだろうか。

このウチニョーが、今回問題としている「中筋川トゥール墓」とどのような関係にあるかが難しい。琉球大学の稲村務氏(人類学)が酒井氏本人から、ウチニョーと同じ箇所ではないかとの返答を得たというが、酒井氏自身が記録している様相と「中筋川古墓」はずいぶん風景は違っている。してみれば、酒井氏が記している「入口付近には今も頭骨が2~30個ある」という箇所がそれに当たる可能性があると考えられる。筆者の聞き取りでは、ウチニョーは図示したように「中筋川古墓」に近い場所であった。1985年当時の森や尾根の様相がどのようなものであったか復元したうえで、ウチニョーへ至る道筋を確認しながら見直す必要があるだろう。

また、「ナグスク」の人骨については、踏査した琉球大学・稲村氏によればそれらは見当たらず、案内者から骨があったという話がなかったという証言をえていることから、葬地のひとつであったという確証は今のところ得られない。

現在の集落位置と人骨があるとされる②~⑤(ナグスクは骨がないため除外)をみると、③ナハドゥルをのぞけば割と近くに位置しているといえる。沖縄の人という死の語りは、戦死であって島外からやってきた人々であるから、いわば「外来者」や「異常死」の隠喩表現とも考えられる。

これらの性格を持つ葬所は、血も時代も遠いので恐れられて当然だろう。空間的にナハドゥルのみが離れていることは、他風葬跡と一線を画すような、時代差や集団差があったのではなかったかと地図を眺めながら現段階では予察する。

「中筋川トゥール墓」がどの時代に使用されていたのかは、まだ特定は難しいといわざるを得ない。後述の聞き取り中にある當ナガ子氏の父が防空壕にしていたという岩穴の実見も必要だろう。當氏は父が戦争前に掘ったと理解されているが、もとは風葬跡で骨をメーユーに移した跡ではなかったか、話を聞く限りでは「中筋川トゥール墓」の岩穴に形態がよく似ているので確認すべきである。

「中筋川トゥール墓」がある特定のピキ集団による利用であったことは、骨量や伝承、目撃談からは間違いないだろうと考える。その葬地空間変遷の位置づけとして、今後検討すべき二つの可能性をあげておく。これは前提として、目手久の土葬以前の風葬の様相として、「ピキ」とよぶ血筋が同じ同族集団のまとまりで墓所を形成していたと考えたときに至る可能性である。

なお、徳之島で夏場に行われる浜おりは、ある特定集団で決まった浜に下りて儀礼を行う民俗行事であるが、それも元は風葬地を同じくするものの集団とほぼ一致するのではないかと筆者は考えている。松山光秀による徳和瀬の浜下りの報告でも、集団のそれぞれの決まった浜と対応するように、近くに風葬跡があるという空間配置になっている。目手久の浜下りは廃れて久しいが、やはり特定の集団ごとに下りる浜（8ヶ所。集団名は酒井氏調査時点ですでに復元は難しかったようである）が決まっていたことが報告されている。

《可能性Ⅰ―「中筋川トゥール墓」を比較的新しい葬地とみる場合》

- ① ウチニョー（1800年代まで使用？ 酒井調査より）が東西目手久の風葬地であり、その内部はおそらく「ピキ（同族集団）」ごとに場所が決まっていた。アジドゥル・サベンゾーの風葬跡もそのいくつかの「ピキ」で使用していた葬地であった。
- ② 竹、與など役人層が藩政時代末頃（墓碑より）から、土葬・石塔文化を持ち込みハナサキに墓地をつくる。
- ③ その頃あたりから風葬が禁止、あるいは衰退したことによって、埋葬する空間が必要となって移転がはじまる。
- ④ ピキ単位の墓形態を維持しようとしたところは、すでに土葬をはじめていたハナサキ近くのメーユーや西の大嶺辻に本家の石塔を中心に固まりをみせて墓所を形成していく。また、アーマツピキ、アーマサピキのように新たに自分たちのピキ専用の岩穴を掘り、記憶される先祖の骨と壺を移転させたところも出てきた。
- ⑤ 同時に、ピキ単位の墓形態を解体し、家単位で墓所をつくる場所も出てくる。現在、シマ内に散在する墓はその過程を引き継いでいるのではないか。この傾向はメーユーでも同時に出てくる。
- ⑥ メーユー・大嶺辻が墓所として認識されて集中化していき、散在していた墓も加わっていく。アーマツピキやアーマサピキの集団は岩穴に骨を持ってきていたが、石塔のみをメーユーに移転していき、結果、骨だけが残された。

《可能性Ⅱ―「中筋川トゥール墓」が比較的古い葬地であったとみる場合》

- ① 「中筋川トゥール墓」はウチニョーと空間的につながった、土葬が入る以前からの風葬地であった。

- ②ウチニョーの一帯は、ビキ集団ごとに葬る場所が決まっていた。
- ③風葬禁止によって、埋葬地を求めてビキ集団の墓所移転がはじまる。ビキのなかには、「中筋川ツール墓」のように、そのままの場所で土葬を行うようになった集団もいた。
- ④大嶺辻・メユーにシマの集合墓地化がすすんだことで、「中筋川ツール墓」利用集団もそこに石塔を移転していった。遠い記憶の骨のみがそのまま残された。

6. その他、民俗間取調査ノート

【マタ】 目手久では、谷、迫を「マタ」という。(沖永良部と同じ表現)

【サンゴ石の墓石】

90代の方の記憶には、石塔を建てる為にサンゴ石を採集したり切ったりした記憶はないという。およそ明治期かそれ以前に調達されたものということになる。

【湯水時】

東の家々は、水がないときの洗濯は「サベンゾー（佐弁ゾー。佐弁との間の川）」でしていた。

【墓祭り】

昭和戦前の頃は、旧正月十六日に「墓祭り」といって一族みんなそろって墓で祝いをしていた。今は改正されて新暦正月4日にしている。農業で忙しいので正月期間中に行くように改正されたという。

また、かつては「ドンガ」という12月近くの癸亥（みずのとい）の日にも集まっていた。昼頃から墓で線香をあげて御馳走を食べる。大体夕方5時頃まで2時間程度だった。今は、個人個人で朝早くから行く人もいればゆっくり行く人もいる。今はいろいろな作物を作って忙しいが、昔は黍と芋だけだったので集まりやすかった。

アグレの人たちはみんな同じ一族という思いもあるから、ドンガのときは来た人みんなで一箇所に集まってご馳走を食べた。あちこちに空いている空き地に食べ物を広げた。宴会をするには空いている場所があればどこでもよかった。今はしていない。それぞれで花と線香をあげ終わるとさっさと帰っている。

【浜おり】

浜下りは今はしない。浜ごとに一族で集まるところがあった。「トゥマチン」というところは大量で集まる場所、最後にそろそろころだった。

子供が生まれた家では「トゥマチン」で砂に足をつけさせて祝いをした。三味線、太鼓を鳴らして叩いて祝った。これを「ミーバマクマシ」という。海にはそれぞれ祭る岩が決まっていた。浜下りは復帰してからしなくなった。

【イギリス船が遭難した話】

昔、この近海を航海していたイギリス船が遭難したため、船の宝物が海底に沈んでいるといういわれがある。イギリス墓という言い方はするが、墓があるわけではない。そこに沈んだという話だった。錠も海の中にあったという話を聞いたことはあるが今はないらしい。イギリス人が陸

に上がってきて、若い娘に手をつけたらしい。それで、毛が白い子、目の色が違う子が生まれたという。

【トウリマデ】

火を家でおこさず、浜でご飯を炊いて食べた。家では決して火を焚いてはいけないといわれていた。浜おりとは別で、「トウリマデ」という。トウリマデは一年に一回、日が決まっていた。シマ全員でする行事。日にちは不明。日柄を見る人がいて、その人が教えていた。

【風疹払い】

また、別の行事だったが、昔はハシキヤ（はしか）や風疹にかかって一週間ぐらいした頃に、稲藁で箸と丸いカマドの形を作った。その中には竹を横にして十字にして、年の数だけご飯粒をつけた。厄払いみたいなものだった。箸にする植物は、シダの仲間のウラジロの根も使った。これは行事名は特にない。風疹になった子供を持つ家がする。「ハシカはもう終わりましたから、年と一緒に送りますよ、」という意味だと教えられたという。

丸く藁で作るものは、浜下りでは使わなかった。井ノ川は浜下りのときに作る。

【田んぼ】

田んぼで初めてその年の刈り取りをするときは、自分の田畑でそれぞれで拝んでいた。92歳の松田氏の記憶では小さい頃からそのようにしていたという。特別な聖地的田んぼの存在は伝わっていない。

喜念の上には「イジュンダ」という広い田があった。昔はフカソーの泉の下は田んぼだった。フーヨーの泉の近くには鍾乳洞があるらしい。

目手久闘牛場は、元は田んぼだったのを集落で買った。今は闘牛はしていない。

【火の玉】

戦前は火の玉（島口でチュウダマ）がよく飛んでいた。メーユの付近は火の玉がよく通る場所だったという。「ウントノチ」の八幡に集まって踊りをして帰るとき、メーユの下の付近で火玉が出るのをよくみたらしい。赤いのが出たら女、青いのは男だといわれていたという。9時、10時頃にパッパパッパ出ることがあった。火の玉をみても話してもいい。話者の方々もよくみたという。ある大和に出ている人が死んだときは、シマで火の玉になって知らせて出てきたといわれていたこともあった。

火の玉は見る人はみる。見ない人はみない。下にいったら早くなる。上にいったら遅くなるといわれ、長く火が続くといっていた。

アコウの木を「ウスク」という。それが危ない、怖いといわれる。ウスクをシマの人は嫌う。ケンモンがそれに座るといふ。ガジマルについてはあまりいわない。メーユにも大きなウスクがあったが、そこはあまりケンモン目撃の名所ではなかった。

【婚姻関係】

婚姻関係は、昔は目手久内同士が多かった。あまり外とはしなかった。いとこ同士で結婚する

こともあった。

西と東との縁組もありはしたが、多くはなかった。アガレはアガレでの結婚が多かった。92歳の松田氏が若い頃は、すでに他シマから男たちが来ることもあった時代だという。三味線を担いできた男と知り合って結婚した人や、親同士でいいなずけで結婚する人もいたという。

【防空壕】

戦時中、ウエバルに住んでいた人たちは、防空壕は畑の岩そばに鍾乳洞があったのでそこに隠れた。中山などその近辺のシマの人に頼んでそこに防空壕を作ってもらったこともあった。目手久は自分の宅地内にも防空壕を作っていた。

「中筋川トール墓」裏の少し上のほうに、今は土地改良して整備されてきれいになっているが、當ナガ子氏の父親がきれいに広いところに穴を掘ってあった。一方だけ開いたままの穴で、片方側から銃撃されると隠れるところもないような岩だった。家よりも広いところだった。そこに学校の御真影とか書類とか全部そこにあった。

【武運長久祈願】

目手久から出征する人たちは、八幡様と喜念グンギンを拝んでいた。あちこちから来ていた。それと井之川岳。頂上に青年団で上っていた。青年団で元日の日について祈願していた。武運長久の祈りは井之川岳と八幡神社、喜念権現が中心だった。井之川岳に何か持っていった覚えはない。

【千人針・ウナリガミ】

千人針もしていた。タオルに赤い糸で縫った。寅年の人は自分の年だけ結べるといわれた。寅年は何回も縫えて、ほかの人は一個ずつだった。五円玉（五銭か？）を縫いこんでいた。公にするので縫いこんでいたのはこのお金ぐらいだった。処女団では慰問袋に手紙、千人針、髪の毛を縫い込んだり、お守りを送った。千人針は男は縫わない。千人針を縫ったらいけない人は、お産した人や悔やみの人もしなかった。

ウナリガミといって、妹が兄を守るという言い方は当時も聞いたことがある。

7. 今後に向けて

今回の調査によって得られた情報は以上のとおりである。目手久の葬地変遷に関わる調査は、当初から特定集団（ビキ）の実態を明らかにすべきだろうという直感が働いたこともあって、東西目手久のおおまかな区画名称と屋号的な語彙の収集を最初に行う必要があった。この区画図については下書きができたので、あとは酒井氏のデータと照らし合わせて聞き取りで精度を高めていくのみである。

奄美諸島の民俗空間研究において、シマの区画名とビキ集団が一致するかどうかといった視角（地縁と血縁は一致するか）からの研究はこれからである。現在の聞き取りでの再構成が実際には難しいことは間違いない。とはいっても、「アーマサビキ」という集団名がある一方で、「アーマサ」という区画がある事実をこれからどのように解釈していけばよいのだろうか。

継続した眼差しを持って目手久を見ていくならば、次回調査ですべき事項としては、①現在の西・大嶺辻の墓地形成過程、②墓碑年代の記録分析、③男性話者からの聞き取り（今回は女性が

中心であった。)、④アーマサビキ、アーマツビキの方からの直接的聞き取り、⑤家ごとの浜おり集団の確認(もう無理かも知れないが)、⑥サベンゾーの風葬跡と佐弁住民との関係、などがある。

同時に風葬跡の踏査が不可欠であることは言うまでもない。踏査をもとに、少なくとも地図に人骨がある場所の正確な位置は押さえないが、それも大変な作業である。踏査によって、同じ風葬地帯であっても、ビキ単位とみられるエリア分けが認められるかどうか、各風葬跡の甕や陶器類の年代構成に違いはないか、といった確認していくべき事項は多く興味はつきない。こうした一連の作業は、徳之島の葬地空間の変遷を知るための指標モデルとして調べ上げていくことが望まれる。海岸部の弥生期「トマチン遺跡」、中世相当期の葬地を考える素材としての風葬跡、実測がとられた「中筋川トゥール墓」、藩政末期の郷土家の土葬墓「ハナサキ」、近代における石塔の島への浸透経過など、トータルにみて目手久は重要な地区であって、今後、様々な問題を提起できる場所になるといえるだろう。

参考文献

酒井正子「歌とシマ空間—徳之島・目手久集落における音楽民俗誌の試み—」『南日本文化 第26号』(鹿児島短期大学付属南日本文化研究所 1993)

第6章 総括

1. 遺跡の概要

中筋川トゥール墓跡は、畑地帯総合整備事業（目手久地区）の工区内で発見された近世から近代の墓地である。墓跡は標高約84mの琉球石灰岩の丘陵上に立地し、墓跡は丘陵斜面を削り貫いた横穴の中に営まれている。なおトゥール墓とは、山の斜面、崖、岩陰などを利用した葬所のことを指し、奄美諸島に多く点在する古い墓地の総称として広く知られている。トゥール墓は幕末期における奄美大島の習俗を描いた『南島雑話』に「戸保呂之図」と記されており、本遺跡は文献記録を実証する重要な遺跡と言える。

本遺跡の調査の結果、墓の前庭部に設置された石積みが発見され、墓坑内に無数の人骨が安置されている状況が確認された。墓坑の中からは埋葬と関連する蔵骨器、供献品が比較的多く得られた。



第21図 南島雑話に描かれた戸保呂之図

2. 墓跡の特徴

墓跡の前庭部両側には、前庭部入口から墓坑開口部に向かって石灰岩の石積みが設置されていた。それらの規模は2.5m×3.5m（東側）、2.0m×1.5m（西側）、高さ0.8m程度であった。これらは墓坑開口部を半閉塞し、なおかつ前庭部に墓道を設ける役割を担っていたと想定される。

墓跡の主体部は前庭部の奥壁を削り貫いた横穴であった。長方形の平面形を呈し、その規模は長辺約5.8m、短辺3.3m、開口部の高さは約1.0mである。開口部は入念に成形されており、墓坑を閉塞するための段が明瞭に残されている。開口部の上面には凹みが2箇所確認されたので、本来は木柱が設置されていた可能性が考えられた。先述した石積みは開口部に沿って設置されているが、この段とはやや不整合的に積まれているため、木柱をもつ閉塞板が倒壊したのち石積みが設置された可能性が考慮される。

3. 人骨と遺物の検出状況

墓坑内には多数の人骨が納骨されていた。人骨は壺や甕などの蔵骨器に収められているものと、墓坑内に直におかれるものの両者がある。人骨の部位は頭骨が大半を占め、四肢骨は少なかった。四肢骨は奥壁と両側壁に沿って置かれ、頭蓋骨は墓の中央部に集中する状況が窺えた。壁面上段の埋葬はやや乱雑に置かれている一方で、下段の埋葬は墓坑の平面形に沿った形で整然と並べられている印象を受ける。下段の埋葬は北側に顔面を向ける傾向がある。

蔵骨器の一部は床面に設置した状態で置かれているので、これらは墓坑の掘削直後、第2層堆積以前に収納されたと考えられる。蔵骨器に納められている人骨も頭骨のみが複数重なった状態で納骨される例が圧倒的に多い。

4. 出土遺物の特徴

出土した遺物は中国産、東南アジア産陶器など15、16世紀代のものが一部検出されたが、薩摩焼、琉球産陶器、肥前産磁器など17世紀後半から18世紀代に位置付けられるものが多かった。

また、マキ科と推定される木片や銅製の飾り金具、鉄釘も発見されたため、本来は木製厨子も納められていた可能性が高い。

これらの遺物は沖縄諸島、先島諸島で発見される古墓でも確認されており、近世の琉球列島を特徴付ける試料群が徳之島において発見されたことは非常に意義深いものである。

5. 出土人骨の特徴

出土したすべての人骨を専門家に送付し、形質人類学的計測と観察を依頼した。その結果、伊仙町内の阿三、犬田布で発見された近世人骨と類似し、当該期の琉球列島中部圏（奄美、沖縄諸島）に居住した人々と近い特徴をもつことが明らかとなった。

また、性別と年齢の鑑定によると、男女とも幼児から高齢の人骨が納められていたことが明らかとなった。人骨の埋葬状況と性差、年齢差には偏りが認められず、殺傷痕など特殊な観察所見も得られていないことからすると一般的な人々の墓地であった可能性が高いと想定される。

6. 民俗調査の結果

目手久集落内における本遺跡のあり方を探るため、民俗学の専門家に聞き取り調査を依頼した。その結果、中筋川トゥール墓跡はとあるビキ集団（同族集団）によって使用されていた可能性が高いという結論が得られた。さらに、本遺跡の周辺にも類似した墓地が存在しているようであり、今後の調査によっては他の墓地との関係や墓地の移転、廃絶の時間的推移を復元できる可能性が示された。徳之島においては発掘調査と遺跡周辺の聞き取り調査が地域史の復元にむけて効果的であると言えるであろう。

7. 遺跡の取り扱いについて

伊仙町教育委員会は本遺跡の重要性に鑑みて、古来より伝わる伝統的な墓として中筋川トゥール墓跡を現地に保存することを計画した。そのため、地域住民に遺跡の重要性を説明し、遺跡保存に関する理解を求める協議を幾度となく重ねた。その結果、遺跡の一角が畑地として整備される中、一つの墓地だけが現地に残される状況は地権者、集落としても好ましくないという結論に達し、遺跡は調査後に畑地に改良されることとなった。しかしながら、遺跡の取り扱いを巡って県、町、集落が協議を重ね、ひとつの結論に到達できたことは、伊仙町における埋蔵文化財行政の方向性を探る上で大変意義深いものであった。今後もこの教訓を活かしながら事業を進めていきたい。事業の推進に伴ない多大なご協力を賜った関係機関、関係各者のみなさまに記して謝意を申し上げます。

参考文献

- 名越左源太 国分直一・恵良宏校註 1984a『南島雑話1』東洋文庫
 名越左源太 国分直一・恵良宏校註 1984b『南島雑話2』東洋文庫

第Ⅱ部

中筋川トール墓跡出土人骨の計測と観察の結果

中筋川ツール墓跡出土人骨の計測と観察の結果

鹿児島女子短期大学 竹中正巳・下野真理子

凡例

中筋川ツール墓跡出土人骨の残存部位を記した図と計測値と頭蓋形態小変異の出現の有無を付録のCD-Rに収録した。第Ⅰ部第4章において言及した第2から12表は、すべてこちらのほうに収録されている。

収録している図表の目次は以下のとおりである。

目次

第Ⅱ部 中筋川ツール墓跡出土人骨の計測と観察の結果(付録CD-R)

挿図目次

第22図 中筋川ツール墓跡出土人骨の遺存部位

表目次

第2表	出土人骨の性別・年齢・特記事項
第3表 - 1	出土男性成人骨の脳頭蓋計測値(mm)及び示数
第3表 - 2	出土女性成人骨の脳頭蓋計測値(mm)及び示数
第4表 - 1	出土男性成人骨の顔面頭蓋計測値(mm)及び示数
第4表 - 2	出土女性成人骨の顔面頭蓋計測値(mm)及び示数
第5表 - 1	出土男性成人骨の顔面平坦度計測値(mm)及び示数
第5表 - 2	出土女性成人骨の顔面平坦度計測値(mm)及び示数
第5表 - 3	出土未成年骨の顔面平坦度計測値(mm)及び示数
第6表 - 1	出土男性成人骨の頭蓋形態小変異の出現状況
第6表 - 2	出土女性成人骨の頭蓋形態小変異の出現状況
第6表 - 3	出土性別不明成人骨の頭蓋形態小変異の出現状況
第7表 - 1	出土男性成人骨の上腕骨計測値(mm)及び示数
第7表 - 2	出土女性成人骨の上腕骨計測値(mm)及び示数
第8表 - 1	出土男性成人骨の橈骨計測値(mm)及び示数
第8表 - 2	出土女性成人骨の橈骨計測値(mm)及び示数
第9表	出土男性成人骨の尺骨計測値(mm)及び示数
第10表 - 1	出土男性成人骨の大腿骨計測値(mm)及び示数
第10表 - 2	出土女性成人骨の大腿骨計測値(mm)及び示数
第11表 - 1	出土男性成人骨の脛骨計測値(mm)及び示数
第11表 - 2	出土女性成人骨の脛骨計測値(mm)及び示数
第12表	出土男性頭蓋計測値(mm)及び示数の比較

第 12 表 出土男性頭蓋計測値 (mm) および示数 (C.D.R. 試料表の一部)

	中館川 (徳之島)			阿三・大田彦 (徳之島)			奄美群島			与島島			キツチのガマ (久米島)			神鍋本島			玉島			長島 (宮古島)			松之元 (徳島州)			鹿児島 (鹿児島州)					
	N	M	S.D.	N	M	S.D.	N	M	S.D.	N	M	S.D.	N	M	S.D.	N	M	S.D.	N	M	S.D.	N	M	S.D.	N	M	S.D.	N	M	S.D.			
1	61	180.5	5.90	81	182.1		37	183.4		27	176.5		70	182.4		11	183.2		11	183.2		26	177.4		26	177.4		26	177.4		26	177.4	
8	10	141.2	5.19	80	140.2		28	142.8		27	140.3		68	141.1		12	138.4		12	138.4		26	143.4		26	143.4		26	143.4		26	143.4	
17	21	140.9	10.56	63	137.7		33	136.5		23	135.8		34	136.8		7	137.4		7	137.4		26	139.1		26	139.1		26	139.1		26	139.1	
8/1	47	78.2	3.54	80	77.1		37	77.3		26	80.3		65	77.4		11	74.9		11	74.9		26	81.0		26	81.0		26	81.0		26	81.0	
17/1	21	77.9	5.31	63	75.8		33	75.8		22	76.4		35	74.8		6	74.9		6	74.9		26	78.5		26	78.5		26	78.5		26	78.5	
17/8	20	99.2	5.31	63	98.0		33	96.0		23	96.4		33	97.0		7	97.8		7	97.8		26	97.1		26	97.1		26	97.1		26	97.1	
23	45	517.8	11.32	76	516.4		37	525.9		23	514.8		39	514.7		10	527.1		8	510.8		37	520.0		37	520.0		37	520.0		37	520.0	
24	34	319.9	9.12	73	315.4		34	320.8		18	306.3		47	316.4		5	329.8		5	329.8		42	314.3		23	332.2		23	332.2		23	332.2	
25	27	134.8	3.40	61	134.4		37	133.8		15	135.1		42	134.3		10	101.4		10	101.4		42	134.3		26	99.5		26	99.5		26	99.5	
45	39	100.1	3.89	70	102.0																												
46	1	123		64	68.2		25	70.0		20	68.7		54	100.8		11	120.3		8	66.8		54	100.8		10	68.5		10	68.5		10	68.5	
47	35	66.3	4.16																														
47/45	1	88.5																															
47/46	1	117.1																															
48/45	17	50.1	2.67	49	51.0		24	50.8		11	51.0		40	51.4		3	48.7		3	48.7		8	51.1		8	51.1		8	51.1		8	51.1	
48/46	29	65.4	4.57	29	66.7		37	62.6		26	61.3		69	62.2		9	62.9		9	62.9		26	63.0		26	63.0		26	63.0		26	63.0	
51	49	41.5	1.76	82	42.7		37	41.0		26	32.7		69	41.0		9	33.7		9	33.7		26	34.8		26	34.8		26	34.8		26	34.8	
52	48	32.5	1.88	82	33.5		37	29.8		26	29.2		68	28.7		9	28.6		9	28.6		26	28.9		26	28.9		26	28.9		26	28.9	
52/51	48	78.5	4.29	82	78.6		37	79.8		26	79.2		68	78.7		10	25.6		10	25.6		26	26.3		26	26.3		26	26.3		26	26.3	
54	52	50.0	2.59	83	50.0		37	51.4		26	49.7		69	52.1		11	52.5		11	52.5		26	52.0		26	52.0		26	52.0		26	52.0	
55	51	51.6	3.27	83	52.0		37	53.2		26	51.7		66	51.3		10	48.7		10	48.7		26	50.6		26	50.6		26	50.6		26	50.6	
54/55	56	71.1	2.06	81	9.2																												
57	52	86.4	5.67																														
50/F	53	15.2	2.06																														
	63	36.0	10.28																														
	38	21.9	2.60																														

1) Dober et al. (2000), 2) 大田(1967), 3) 澤田(1961), 4) 藤田(1970), 5) 原(1971), 6) 原(1971), 7) 原(1971), 8) 原(1971), 9) 原(1971), 10) 原(1971), 11) 原(1971), 12) 原(1971), 13) 原(1971), 14) 原(1971), 15) 原(1971), 16) 原(1971), 17) 原(1971), 18) 原(1971), 19) 原(1971), 20) 原(1971), 21) 原(1971), 22) 原(1971), 23) 原(1971), 24) 原(1971), 25) 原(1971), 26) 原(1971), 27) 原(1971), 28) 原(1971), 29) 原(1971), 30) 原(1971), 31) 原(1971), 32) 原(1971), 33) 原(1971), 34) 原(1971), 35) 原(1971), 36) 原(1971), 37) 原(1971), 38) 原(1971), 39) 原(1971), 40) 原(1971), 41) 原(1971), 42) 原(1971), 43) 原(1971), 44) 原(1971), 45) 原(1971), 46) 原(1971), 47) 原(1971), 48) 原(1971), 49) 原(1971), 50) 原(1971), 51) 原(1971), 52) 原(1971), 53) 原(1971), 54) 原(1971), 55) 原(1971), 56) 原(1971), 57) 原(1971), 58) 原(1971), 59) 原(1971), 60) 原(1971), 61) 原(1971), 62) 原(1971), 63) 原(1971), 64) 原(1971), 65) 原(1971), 66) 原(1971), 67) 原(1971), 68) 原(1971), 69) 原(1971), 70) 原(1971), 71) 原(1971), 72) 原(1971), 73) 原(1971), 74) 原(1971), 75) 原(1971), 76) 原(1971), 77) 原(1971), 78) 原(1971), 79) 原(1971), 80) 原(1971), 81) 原(1971), 82) 原(1971), 83) 原(1971), 84) 原(1971), 85) 原(1971), 86) 原(1971), 87) 原(1971), 88) 原(1971), 89) 原(1971), 90) 原(1971), 91) 原(1971), 92) 原(1971), 93) 原(1971), 94) 原(1971), 95) 原(1971), 96) 原(1971), 97) 原(1971), 98) 原(1971), 99) 原(1971), 100) 原(1971), 101) 原(1971), 102) 原(1971), 103) 原(1971), 104) 原(1971), 105) 原(1971), 106) 原(1971), 107) 原(1971), 108) 原(1971), 109) 原(1971), 110) 原(1971), 111) 原(1971), 112) 原(1971), 113) 原(1971), 114) 原(1971), 115) 原(1971), 116) 原(1971), 117) 原(1971), 118) 原(1971), 119) 原(1971), 120) 原(1971), 121) 原(1971), 122) 原(1971), 123) 原(1971), 124) 原(1971), 125) 原(1971), 126) 原(1971), 127) 原(1971), 128) 原(1971), 129) 原(1971), 130) 原(1971), 131) 原(1971), 132) 原(1971), 133) 原(1971), 134) 原(1971), 135) 原(1971), 136) 原(1971), 137) 原(1971), 138) 原(1971), 139) 原(1971), 140) 原(1971), 141) 原(1971), 142) 原(1971), 143) 原(1971), 144) 原(1971), 145) 原(1971), 146) 原(1971), 147) 原(1971), 148) 原(1971), 149) 原(1971), 150) 原(1971), 151) 原(1971), 152) 原(1971), 153) 原(1971), 154) 原(1971), 155) 原(1971), 156) 原(1971), 157) 原(1971), 158) 原(1971), 159) 原(1971), 160) 原(1971), 161) 原(1971), 162) 原(1971), 163) 原(1971), 164) 原(1971), 165) 原(1971), 166) 原(1971), 167) 原(1971), 168) 原(1971), 169) 原(1971), 170) 原(1971), 171) 原(1971), 172) 原(1971), 173) 原(1971), 174) 原(1971), 175) 原(1971), 176) 原(1971), 177) 原(1971), 178) 原(1971), 179) 原(1971), 180) 原(1971), 181) 原(1971), 182) 原(1971), 183) 原(1971), 184) 原(1971), 185) 原(1971), 186) 原(1971), 187) 原(1971), 188) 原(1971), 189) 原(1971), 190) 原(1971), 191) 原(1971), 192) 原(1971), 193) 原(1971), 194) 原(1971), 195) 原(1971), 196) 原(1971), 197) 原(1971), 198) 原(1971), 199) 原(1971), 200) 原(1971), 201) 原(1971), 202) 原(1971), 203) 原(1971), 204) 原(1971), 205) 原(1971), 206) 原(1971), 207) 原(1971), 208) 原(1971), 209) 原(1971), 210) 原(1971), 211) 原(1971), 212) 原(1971), 213) 原(1971), 214) 原(1971), 215) 原(1971), 216) 原(1971), 217) 原(1971), 218) 原(1971), 219) 原(1971), 220) 原(1971), 221) 原(1971), 222) 原(1971), 223) 原(1971), 224) 原(1971), 225) 原(1971), 226) 原(1971), 227) 原(1971), 228) 原(1971), 229) 原(1971), 230) 原(1971), 231) 原(1971), 232) 原(1971), 233) 原(1971), 234) 原(1971), 235) 原(1971), 236) 原(1971), 237) 原(1971), 238) 原(1971), 239) 原(1971), 240) 原(1971), 241) 原(1971), 242) 原(1971), 243) 原(1971), 244) 原(1971), 245) 原(1971), 246) 原(1971), 247) 原(1971), 248) 原(1971), 249) 原(1971), 250) 原(1971), 251) 原(1971), 252) 原(1971), 253) 原(1971), 254) 原(1971), 255) 原(1971), 256) 原(1971), 257) 原(1971), 258) 原(1971), 259) 原(1971), 260) 原(1971), 261) 原(1971), 262) 原(1971), 263) 原(1971), 264) 原(1971), 265) 原(1971), 266) 原(1971), 267) 原(1971), 268) 原(1971), 269) 原(1971), 270) 原(1971), 271) 原(1971), 272) 原(1971), 273) 原(1971), 274) 原(1971), 275) 原(1971), 276) 原(1971), 277) 原(1971), 278) 原(1971), 279) 原(1971), 280) 原(1971), 281) 原(1971), 282) 原(1971), 283) 原(1971), 284) 原(1971), 285) 原(1971), 286) 原(1971), 287) 原(1971), 288) 原(1971), 289) 原(1971), 290) 原(1971), 291) 原(1971), 292) 原(1971), 293) 原(1971), 294) 原(1971), 295) 原(1971), 296) 原(1971), 297) 原(1971), 298) 原(1971), 299) 原(1971), 300) 原(1971), 301) 原(1971), 302) 原(1971), 303) 原(1971), 304) 原(1971), 305) 原(1971), 306) 原(1971), 307) 原(1971), 308) 原(1971), 309) 原(1971), 310) 原(1971), 311) 原(1971), 312) 原(1971), 313) 原(1971), 314) 原(1971), 315) 原(1971), 316) 原(1971), 317) 原(1971), 318) 原(1971), 319) 原(1971), 320) 原(1971), 321) 原(1971), 322) 原(1971), 323) 原(1971), 324) 原(1971), 325) 原(1971), 326) 原(1971), 327) 原(1971), 328) 原(1971), 329) 原(1971), 330) 原(1971), 331) 原(1971), 332) 原(1971), 333) 原(1971), 334) 原(1971), 335) 原(1971), 336) 原(1971), 337) 原(1971), 338) 原(1971), 339) 原(1971), 340) 原(1971), 341) 原(1971), 342) 原(1971), 343) 原(1971), 344) 原(1971), 345) 原(1971), 346) 原(1971), 347) 原(1971), 348) 原(1971), 349) 原(1971), 350) 原(1971), 351) 原(1971), 352) 原(1971), 353) 原(1971), 354) 原(1971), 355) 原(1971), 356) 原(1971), 357) 原(1971), 358) 原(1971), 359) 原(1971), 360) 原(1971), 361) 原(1971), 362) 原(1971), 363) 原(1971), 364) 原(1971), 365) 原(1971), 366) 原(1971), 367) 原(1971), 368) 原(1971), 369) 原(1971), 370) 原(1971), 371) 原(1971), 372) 原(1971), 373) 原(1971), 374) 原(1971), 375) 原(1971), 376) 原(1971), 377) 原(1971), 378) 原(1971), 379) 原(1971), 380) 原(1971), 381) 原(1971), 382) 原(1971), 383) 原(1971), 384) 原(1971), 385) 原(1971), 386) 原(1971), 387) 原(1971), 388) 原(1971), 389) 原(1971), 390) 原(1971), 391) 原(1971), 392) 原(1971), 393) 原(1971), 394) 原(1971), 395) 原(1971), 396) 原(1971), 397) 原(1971), 398) 原(1971), 399) 原(1971), 400) 原(1971), 401) 原(1971), 402) 原(1971), 403) 原(1971), 404) 原(1971), 405) 原(1971), 406) 原(1971), 407) 原(1971), 408) 原(1971), 409) 原(1971), 410) 原(1971), 411) 原(1971), 412) 原(1971), 413) 原(1971), 414) 原(1971), 415) 原(1971), 416) 原(1971), 417) 原(1971), 418) 原(1971), 419) 原(1971), 420) 原(1971), 421) 原(1971), 422) 原(1971), 423) 原(1971), 424) 原(1971), 425) 原

圖 版



1. 遺跡遠景（北より）



2. 遺跡遠景（南より）



3. 伐採前遺跡近景（東より）



4. 伐採後遺跡近景（東より）



5. 内部の状況①（東より）



6. 内部の状況②（東より）



7. 取り扱いに関する協議（東より）



8. 調査直前の状況（東より）



1. 伐採、清掃後の近景（東より）



2. 写真測量風景（東より）



3. 人骨検出作業（北より）



4. 人骨検出作業（西より）



5. 人骨取り上げ作業（東より）



6. 人骨梱包作業（東より）



7. 人骨検出状況（北より）



8. 石厨子内人骨埋納状況（北より）



1 墓内部の状況①
(西より)



2 墓内部の状況②
(東より)



3 墓内部の状況③
(北より)

1 人骨の蔵骨状況①
(東より)



2 人骨の蔵骨状況②
(東より)



3 人骨の蔵骨状況③
(東より)



上段 1: 中国産陶器壺 2: 薩摩焼
 3: 琉球産陶器 4: 中国産?陶器
 中段 5、6: 東南アジア産陶器
 中段、下段 1~4: 薩摩焼
 (上段 1~4、中段 5~6: 第7図)
 中段、下段 1~4: 第8図





1



2



3



4



5

1、2：薩摩

3：肥前産？

4：不明

5：石灰岩製石厨子

(1-4：第9圖・5：第10圖)